

---

# 雨の足音

EAST

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨の足音

### 【Nコード】

N9773X

### 【作者名】

EAST

### 【あらすじ】

ある雨の夜、主人公の元に『雨の精霊』を名乗る少女がやって来る。少女は主人公の願いを何でも三つだけ叶えてくれるという。ただし叶えるには条件があり、少女が願い事として相応しいと納得する必要があるのだ。この夜から、雨の精霊の少女と、主人公の奇妙な共同生活が始まる。

## プロローグ（前書き）

とある新人賞向けに書いた原稿を、期間限定で公開させていただき  
ます。なにぶん初めてのジャンルですので、至らない所が数多くあ  
るかと思っています。ご意見ご感想などいただけましたら幸いです。 1  
1 / 1 : 前後の整合をとるために若干の加筆をしました。

## ブローグ

俺は、雨の夜が好きだ。

もちろん、洪水になってしまつような激しい雨は困りものなんだけど、静かな夜の街に響く雨の音を聴くのは心地いい。まるで天から落ちてくる滴が、屋根や地面を叩いて音楽を奏でているような、そんな気分になる。

今夜はちょうど、俺好みの雨の夜だった。

雨粒が屋根を叩く音をBGMに、俺は苦手な数学の宿題をやっている。でも、気分がいいと何故か問題を解くのもはかどるから不思議なものだ。ほら、普段なら五分は頭をフル回転させなきゃならぬ問題が、あっさりと解けてしまった。

「毎日が雨ふりだったら、俺の成績はうなぎ登りだな」

誰にいうともなく、俺は呟く。応える者はだれもない。

俺はこの家に一人きりで住んでいる。母親は物心つかないうちに病気で亡くなっていたし、父親は海外赴任で欧州暮らしだ。父の赴任が決まる直前に、今通っている私立仁正学園高校の合格が決まり、俺は父に無理を言つて一人日本に残ることにした。

「一人には慣れたけど、やっぱりこの家は一人で住むには広すぎるよな……」

俺は口の中でそう呟くと、天井の蛍光灯の光に惹かれた蛾が小さな羽をパタパタと羽ばたかせて飛んでいるのを、ぼんやりと見ていた。

雨はさっきより強くなっている。

時を追うごとに、屋根を叩く雨の音が大きくなっているのがハッキリ分かる。

まるで雨雲の本体が近づいてくる足音のようだ。

これはもしかしたら雷くらいは鳴るかもしれない。

次の瞬間、家全体が震える程の大音響とともに、蛍光灯の灯りが消えた。

電気という文明の力で煌々と照らされていた部屋の中は、一転原始の闇に包まれ、灯りに慣れきった目には全くなにも映らない。

「参ったな、停電か？ 落雷の影響……にしちゃ、部屋の外は明るくならなかったけど」

カーテンを開けて隣の家を見る。やはり電気は消えているようだ。ということは、この一帯が停電しているということか。仕方なく、俺は停電が回復するのを待った。

その時、俺の頬にぽつりと冷たい物が当たった。

「雨漏り？ にしてはえらく量が多いな」

真っ暗な天井を見上げると、濃い闇の中に僅かに薄い闇がある。

あれは蛍光灯の横あたりだろうか。どうやら、屋根と天井に大穴が空いているらしい。落雷はうちを直撃したようだ。

「参ったな……。物置にブルーシートか何かあったっけ」

唐突に部屋の蛍光灯が点灯した。闇になれきった俺の目に、白い光が突き刺さる。思わず俺は目を閉じていた。

だが、閉じるまでの一瞬の間に見えた『それ』に、俺は気づいてしまった。

『それ』は人の形をしていた。

……ちよつと待て、人だつて？

俺は恐る恐る目を開ける。そこに『それ』は確かにいた。

部屋の真ん中あたりで俺と同じ年ぐらいの女の子が、目を回してぶつ倒れている。

当然、俺の知らない顔だ。

「……これはあれだ、きつと夢だな。はやく夢から覚めないと……」  
俺は部屋の隅に置いてあった極厚の月刊マンガ雑誌を手に取ると、

その角で少女の後頭部を思いきりぶん殴った。

「いった　　っ！　はっ！　ここはどこですかっ！？　なんだか後ろ頭がズキズキしますっ！」

「それはきつと、うちの天井をぶち破ったときの痛みだろうね。目は覚めたかい？」

「はいっ！　もうバツチリ！　で、なんでわたしはこんな小汚い部屋にいますしょうか？」

俺は握りしめた凶器（極厚月刊マンガ雑誌）で再度少女の側頭部を強打した。

「へぶんっ！！」

「小汚くなつたのは君のせいだろ！　人んちの屋根をぶち破って登場なんて、どこのアニメかマンガだよ！」

俺はあまりの少女の失礼さ加減に、手にした凶器（極厚月刊マンガ雑誌）を連打したい衝動をなんとか抑え、まだ頭をさすっている少女をじつくりと観察した。

床にぺたりと座り込んでいたのでよく分からないが、背丈は俺より頭一つくらい低いだろうか。ストレートの黒髪は艶やかで、腰のあたりまで伸ばしているが、雨に濡れた上に天井を破壊したときについたのだろう細かい木くずやら何やらで悲惨な状態だ。

すらりとしていながらふつくと柔らかかみのある手脚や腰のラインはまさに神の造形。胸は悲惨なほどぺったんこだけど、その上にっいている小ぶりの頭には、これまた精緻の限りを尽くしたような目鼻が、バランスも絶妙に配置されている。

服は白い上品なワンピース。高原の別荘地で日傘でもさして散歩していたら、さぞ似合うだろう。ずぶ濡れで、その上木くずまみれだけ。

要するに、一言でいえば目の前にいる少女は、俺の美的感覚からするとかなりの美少女なのだった。だが、何かが俺の脳裏に引っかかっていた。何かは分からない。ただ言えるのは、何とも言えない既視感のようなものを、この少女から感じるということだけだ。確

かに知らないはずなのに、どうしてもどこかで逢ったことがあるような気がしてならないのである。

「あううう……。そうは言われましても……。はっ！ 思い出しましたっ！」

少女は頭からパラパラと木片を落としながら、すつくと立ち上がった。立ち上がると、少女の頭のでっぺんがちょうど俺のあのあたりにくる。綺麗な形のつむじが俺の目の前にあった。

「わたし、雨の精霊なんです！ この世にあって雨をこよなく愛する人の願いを叶えるため、雨の神様の使者として、こうして時々地上に降りてくるんですっ！ 天文学的な確率でしか有り得ないことなんです！ あなたはその幸運に感謝しなくてはいけませんよっ！」

無残なほど平べったい胸をそっくり返して、少女はなにやら電波なことを言いだした。もしかして少し頭を強く殴りすぎたのだろうか？ 俺が少しばかり心配になってきたところで、少女はブンっと音がしそうな勢いで俺の方を振り向いた。

「願い事を叶えるには、いくつかの条件があります！ 叶えられる願いは三つです！ あ、願い事を無限に増やす……っていうのは無しですよ？ それ以外で三つだけ、あなたの願いを叶えてあげます。条件というのは、わたしが『願い事に相応しい』と認めることです！」

目の前の少女は自信満々の表情で、腰に手を当てて仁王立ちしている。

……こういう場合、病院に連絡するべきなのか？ 救急車を呼ぶべきか？ それとも警察だろうか？ 俺はしばらく考えたあと、これ以上ないであろう願い事を彼女に伝えることにした。

「願い事は何でもいいんだよね？ んじゃ、とりあえず君がぶち抜いた屋根と天井を修理してほしいんだけど」

彼女が落ちてきた時に開けてくれた大穴から雨が降り込んで、俺の部屋は悲惨な状態になりつつある。まずはこれを何とかしてもらわねばなるまい。

「おやすい御用ですっ！」

少女はすつと目を閉じ、深く息を吸い込んだ。その花びらのような唇から、聞き取れないほど繊細なつぶやきが漏れ出てくる。その言葉は英語でも日本語でもない独特の響きをもっていて、不思議な旋律を伴った音の流れとでも言えればいいのだろうか。意味は分からないが、耳に心地いい。

やがて、少女の身体がぼうつと光を帯び始めた。光はだんだんと強くなり、やがて直視してられないほどの明るさになる。俺は少女から目を逸らし、片手で目を覆い光を遮った。

唐突に光が消える。元の蛍光灯の明かりだけが、俺の部屋を照らしていた。小さな蛾も蛍光灯の周りで羽ばたいている。

降り込んだ雨でびしゃびしゃだった絨毯も、大穴が開いていた天井も、そこに転がっていた木ぎれや瓦の破片なども、すっかり姿を消して、部屋は元通りの姿を取り戻していた。

「どうでしょうか！ お気に召しましたかっ？」

少女はくりくりと大きな瞳をきらきら光らせながら、上目遣いで俺を見上げてくる。

部屋の修復のついでにずぶ濡れだった自分の『修復』もしたようで、艶やかな髪はさらさらに乾き、ぐしょぐしょだったワンピースはふんわりと上品な曲線を描いている。胸のあたりは見ていて哀しいほど扁平だけど。

いや、ちよつと待て。

俺はさっきからとんでもない現象に遭遇しているんじゃないのか？ 落ち着いて考える。女の子が空から屋根をぶち抜いて降ってきた、自分は『雨の精霊』だと名乗りあつという間に部屋を元通りに修復してしまった。

「……やっぱり夢だ。俺はタチの悪い夢を見ているに違いない。はやく夢から覚めないと……」



俺は握りしめたままだった極厚月刊マンガ雑誌を大きく振りかぶると、目の前で目をきらきらさせている少女の脳天に打ち下ろした。「いた　っ！　はっ！　わたし何でこんなところに？　あなたは誰ですかっ！」

「俺はこの部屋の主だ！　なんだよ！　悪夢じゃないのかよ！　なんの因果で俺がこんな目に遭うんだよ！」

「そうでしたっ！　思い出しましたよ！　願い事はあと二つです！　さあ、何なりとおっしゃって下さい！」

「だから、そうじゃなくて　。　……願い事はなんでもいいんだっただよね？」

「はいっ！」

「じゃあ俺の目の前から消えてくれ。今すぐ！」

「はいはい、今すぐ……っで、えええええっ！？　そ、そんなの困ります！　それじゃ願い事を叶えたことになりません！　クラオカミさまに叱られちゃいます！」

晴れやかな表情から一転して絶望のどん底に突き落とされたような顔になる少女。

「クラオカミさま？　なにそれ？」

「雨の神様ですっ！　言ってみればわたしたち雨の精霊の眷属を統べる上司ですっ。お願いです、ちゃんとした願い事を言っして下さいっ！」

願い事を言ってくれとしつこく食い下がる少女の脳天にもう一撃加えたい衝動に駆られたが、俺は自制心をフル稼働させて何とか回避すると、俺は少女に尋ねた。

「願いを叶えないと、俺の前からは消えてくれないってこと？」

「はいっ！　それがわたしのお仕事ですからっ！」

「それじゃあ、二つめの願い事。君の名前を教えて。知らないんじや呼びにくいから」

「そんなことでいいんですか？」

少女はくりくりとした目の中に『？』を浮かべている。

「うん。二つめの願い事はそれでいいよ」

俺の言葉に嘘がないと感じたのか、少女は多少不満げな表情を浮かべつつも、こう答えた。

「雨音です。雨の音と書いて、あまね」

「そう、雨音か……。いい名前だ」

「そうですか？ えへへっ、褒められちゃいましたっ。それでは最後の願い事をおっしゃって下さいっ！」

最後の願い事といわれて、俺はなんとも困ってしまった。

願い事はなんでもいいらしい。でも、雨音が納得してくれないと願い事とは認められないようだ。だが、俺は今の生活がそこそこ気に入っていて、特に不満も感じていない。大それた夢もなければ、野心もない。

……死んだ母に会ってみたい気もするが、それは願ってはいいけないことのような気がする。

つまらないヤツだと笑ってくれてもいい。だけど、俺は本当に今のそこそこ楽しい生活に満足しているのだ。

眉間に皺を寄せてなやむ俺の目の前には、胸がぺったんこなこと以外は完璧超人な美少女が瞳を輝かせて立っている。俺の願い事を待ちながら。

「んー、本当に何でも願いを叶えてくれるんだよね。……しばらく考えさせて……。って、これも願い事にカウントされちゃう？」

「特別にノーカウントにしておきますっ！ 願い事が決まるまで、ゆっくり考えてくださいっ。で、わたしからお願いが二つあります。聞いていただけますか？」

「頼み？ いったい何？」

少女は曇りのない笑顔を俺に向けて、問うた。

「まず一つめ。あなたの名前を教えて下さい。知らないと、呼びにくいでしょ？」

そうきたか。確かにこちらはすでに雨音の名前を知っている。でも、俺は自分の名前があまり好きじゃない。……死んだ母が付けた

から、というのは関係ないと思いたいが、多分本当は多いに関係しているのだろう。

だから、俺は幼なじみが俺を呼ぶ渾名を教えることにした。

「みーとでも呼んでくれればいいよ。みんなそう呼ぶし。俺、自分の名前があまり好きじゃないんだ」

「みーくん……。なんか可愛いですねっ！ 仔猫みたいですよっ！」  
「で、二つめの頼み事って、なに？」

少女は再び俺の顔を正面から見つめると、少し緊張した面持ちで言葉を継いだ。少し頬が赤くなってるのは気のせいだろうか？

「えーとですね、最後の願い事が決まるまで、わたしをみーくんのおうちに置いて頂きたいのです。精霊とはいえ、受肉して実体化したら住むところも食べるものも必要になりますので……。ダメ……ですか？」

「いや、ダメって言うか。俺、一応男なんだけど……。それに一人暮らしたし」

なんとというか、この子は俺を一体なんだと思ってるんだろう。それとも男だと意識されてないのか？ 少しは身の危険を感じたりはしないものだろうか。

「一人暮らしなんですかつ！ それはかえって都合がいいですよっ！ ご家族がいらっしゃると暗示をかけたりと色々面倒ですので！」

「いや、そうじゃなくてね。俺は男なんだけど」

「大丈夫ですよっ！ 雨を愛する人に悪い人はいません！ わたしはみーくんを信じます！」

お話にならない。信頼してくれるのはいいんだけど、男として警戒されてないというのもちょっと悲しい。

「分かったよ。願い事が決まるまで、俺の家に居ていい。今日はもう遅いから、とりあえず俺のベッド使って寝て。俺は居間のソファで寝るから」

「いいいえ！ わたしが居間で寝ますからっ！」

「遠慮しなくていいから。布団はちゃんと干してるし、シーツだっ

てちゃんと洗濯してあるから」

雨音はまだ何か言いたそうだったが、俺が引かないことを察したのか、ふうと溜息をついた。

「分かりました。ちよっと着替えさせて頂きますね」

再び雨音が目を閉じ、さっき部屋を修復したときと同じように呪文を詠唱する。身体がまばゆい光に包まれる。光がきえたときには、雨音はピンクのパジャマ姿だった。

「それじゃあ、すみませんが今夜はベッドお借りしますね」

「それでよし。部屋は内側から鍵がかかるから、電灯のスイッチはここね。って、電灯って分かるよね？」

雨音は俺の言葉を聞くと、ぶんぶんという擬音がぴったりな感じに頬を膨らませた。

「その位知っていますっ！ 馬鹿にしないでくださいっ！」

「ごめんごめん。悪気はなかったんだ。精霊だっていうから、人間の常識が通用するか分からなかった。気を悪くしないで」

俺は両手を顔の前で合わせて拝み倒すようにして謝る。ふくれていた雨音だったが、その表情は少しずつ柔和なものになっていった。「それじゃ、俺が出たら鍵をかけてね。何かあったら一階の居間で寝てるからたたき起こして。それじゃ、おやすみ」

「はい！ おやすみなさいです！」

扉を開けて俺は部屋を出た。カチリという鍵をかける音を確認した後、俺は階段をおりて一階の居間へと向かった。

こうして、雨の精霊である雨音と俺との、奇妙な共同生活が始まったのだった。

## ブログ（後書き）

いかがでしたでしょうか？ まずは導入部を公開させていただきます。1～2日に一回のペースで更新していきたいと思っています。よろしければご意見感想をお寄せください。

## 第一章

### みーくんと兩音とひなた

#### 1 (前書き)

本編第一章の1をお送りします。

1 1 / 1

前後の整合をとるために加筆修正をしました。

## 第一章

### みーくんと雨音とひなた

1

なんだかい匂いがする。甘い甘い、花のような香り。何の香りだろう？ 俺は居間のソファアの上でボンヤリとそんなことを考えていた。はて、なんで俺はソファアなんかで寝ているんだっけ。俺はまだ覚めきらない脳みそに無理やり命令して、うつすらと目を開いた。目の前になんだか黒い髪の毛のようなものが見える。それが少女の髪の毛だと気づくまでに、かなりの時間を要した。

「ちよっ！ なんで雨音が俺に抱きついて寝てるんだっ！」

それは昨夜、俺の前に現れた雨の精霊、雨音の頭だった。彼女は俺の胸に顔を埋めて幸せそうに寝息を立てている。なるほど、この甘い匂いは雨音から香ってきていたのか。いやいや、ちよっと待てよ。この状態は非常によろしくない。

朝だから男の生理現象も起こっている。そんな状態でいくら胸が無残なまでに扁平だとはいえ、超絶美少女であるあまねにしがみつかれているのは、蛇の生殺しだ。俺は絡みついている雨音の両腕をそつと解くと、静かに彼女に声をかけた。

「雨音、雨音……。おい、雨音さーん」

俺の胸に埋められていた頭がゆっくりと持ち上がってくる。長いまつげがぴくりと動き、ゆっくりと大きな瞳が開かれていく。その瞳が俺を映している。

「ん……。おはようございます」

「おはよう……。とりあえず、離れてくれないかな……。すぐくまずい体勢になってるんだけど」

雨音は寝ぼけ眼で自分がどういう体勢かを確かめる。次の瞬間、雨音は頭から湯気を噴き出しかねない勢いで真っ赤になると、ボクの隣から跳ね起きた。

「おおお、おはようございますっ！ すすす、すごくいいお天気です！ それと、朝ご飯、できてますよっ！」

雨音はあたふたと窓のところまで行き、シャツと音をたててカーテンを開いた。一瞬、俺の視界が白い光で遮られる。

明るさに慣れた俺の視界に飛び込んできたのは、白のワンピースの上に、普段は俺が料理するときに使ってるちよつと野暮ったいエプロンを着けた雨音の姿だった。

「さ、起きて下さい。朝食はしっかり食べないとダメですよ！」

「う、うん……」

俺は雨音に背中を押されながら、ダイニングへと足をはこんだ。ダイニングのテーブルの上には、だし巻き卵にほうれん草のおひたし、豆腐とネギの味噌汁、それに納豆と、実に正しい日本の朝食が用意されていた。

「冷蔵庫の中身、勝手に使わせていただきました。大した物は作れませんでしたけど、お口に合えばいいんですが……」

俺は黙って席に着く。茶碗に盛られた炊きたてのご飯の香りが、俺の鼻腔をくすぐる。

「さ、召し上がれ」

「い、いただきます」

俺はまず、ネギと豆腐の味噌汁から口を付けた。うん、丁寧に汁を取ってあって、凄く美味しい。ダシの素なんかじゃなくて、ちゃんと煮干しで出汁をとったんだろう。寝起きの身体に染み渡るようだ。続いてだし巻き卵。綺麗に巻かれてほどよく焦げ目がついた卵焼きを見ていると、それだけで口の中に唾が湧いてくる。

「……いかがでしょうか……」

雨音の瞳に不安げな色が滲む。俺は無言でガツガツと食べ続けた。どんな言葉より、一番美味しいことをアピールするには、何も言わずに美味しそうに食べるのが一番だと思ったからだ。俺の食べっぷりを見て、雨音の不安げな表情はだんだんと薄らいでいき、ご飯をおかわりする頃にはすっかり笑顔になっていた。

「ふう……、ごちそうさま。雨音は料理上手いなだね」

「そ、そんなことないですっ。このくらい、女の子なら当然ですよ」



っ

いや、俺はその言葉が嘘であることを嫌というほど知っている。  
女の子なら料理が出来て当たり前？ とんでもない！

世の中には立派な食材を、見るも無惨な物体にメタモルフォーゼ  
させる女が存在するのだ。

そして、そいつは俺の幼なじみであり、すぐ隣に住んでいる。

ピンポーン

玄関のチャイムが軽快な音色で来客を伝える。俺は何故か身の危険を感じた。理屈ではない。生物としての本能が揺さぶられる。そんな恐怖感だ。

「あら、こんな朝早くからお客様ですか？」

雨音はエプロン姿のまま、ぱたぱたと小走りに玄関の方へと向かう。

俺は足の裏が摩擦で焦げるほどのダッシュ力をみせて、雨音の進路を遮った。

「あああ、雨音さん？ ででで出なくていいからね？ ちょっと部屋の奥の方に隠れていてくださると非っ常〜に助かるのですが、お願い出来ませんか？」

「おはよう、みーくん。昨夜はなんか凄い落雷だったけど、大丈夫だった？ ……ところで、その可愛いお嬢さんは一体どなたかしら？」

敵は合い鍵をつかって室内に侵入してきていた！ しかもバツチリと雨音のエプロン姿を見られている。これは非常に危険な状況だ！  
「説明、してくれるよね？」

侵入してきた敵であり、食材を食べ物以外の何かに加工するプロフェッショナルであるところのひなたは、その名の通り日だまりのような笑顔で俺に状況の説明を求めてきた。

居間のテーブルを囲んで、俺とひなたと雨音が顔をつきあわせている。なんだか家族に内緒で女の子を連れ込んだのがばれて、その子を交えての家族会議でもしているかのようだ。いや、状況は大してかわらないけど。

雨音はひなたにあっさりと自分の正体を明かし、自分が俺の願い事を叶えるためにここにいる事も簡単に白状していた。ひなたはショートカットの前髪を弄りながら、うさぐさそうな目を雨音に向ける。

「ふーん。ということは、キミは雨の精霊で、みーくんの願い事を叶えるために空から降ってきたつと、そう言うんだね？」

「はいっ！ その通りですっ」

ひなたはにつこりと微笑むと、その笑顔のままで言い放った。

「ふざけんな、このデンパ女！」

そうなのだ。ひなたという女は超が付く現実主義者で、オカルトとか超常現象の類を一切信じない。「自分の目で見ないと信じない」

どこの話ではなく、例えば自分の目の前に幽霊がいたとしたら、そいつをぶん殴って「ほら、こんなの幽霊でもなんでもないじゃない」とでも言いかねないほど、その手の話を受け付けないのである。

「キミねえ……。どこの家出娘か知らないけど、いくらみーくんがお人好しだからって、十代のやりたい盛りの男の子の家に転がり込むなんて自殺行為よ？ 何をされても文句は言えないんだから！」

「何をされてもってなにさ！ ひなたは俺のことをどういう人間だと思ってるんだ！」

「えーと……。最後の願いが『それ』でしたら、わたしには断るところができないんですか……」

雨音が頬を赤らめ、もじもじしながら話をややこしくしてくれる。「絶対ダメよ！ もっと自分を大切になさい！ それに、みーくんの面倒は昔からボクがみることになってるの。みーくんのお父さん

からも任されてるんだから、キミの出る幕はないよ！」

お隣さんにして物心ついた頃からの幼馴染みであるところのひなたは、半年ほど誕生日が俺より早い。たかが半年なのに、完全にお姉さん気取りで俺の世話を焼きたがる。

(ろくに家事もできないくせに……)

困ったことに食事も作りたがるのだが、俺はありとあらゆる手口を使ってその罠を回避し続けていた。何しろ命がかかってるんだ。それはもう真剣そのものだぞ。

「それはこまりますっ！ わたしは彼の願い事を叶える義務があるんです！ これはわたしの存在意義に関わる問題です！」

雨音は真っ向からひなたに食らいついていた。俺の願いを叶えるためなら身体を差し出すというのも、あながち冗談ではないのかもしれない。

「どうあつても、引く気はないってことね？」

「はいっ！ 他のことで譲歩したとしても、これに関しては譲れません！」

それまで鋭い視線で雨音を睨め付けていたひなただったが、雨音のその言葉を聞くと、ふっと表情を緩めた。

「分かったわ。雨の精霊云々は信用しないけれど、キミがみーくんの願いを叶えたいと本気で思ってることは分かった。でもね」

すっと息を吸い込んで、ひなたは腹の底から響く声で言った。

「みーくんとボクの間割り込めるとおもったら大間違いだよ。十年以上も一緒にいるんだから！ キミが逆立ちしてもかなわないほどの強い絆が、ボクとみーくんの間にはあるんだからねっ！」

ひなたは不適な笑顔を浮かべて雨音の方を見やった。雨音も正面からその視線を受け止める。二人の視線が絡み合う。俺には理解出来ない女の戦いが繰り広げられていた。

「えーと、ひなた、雨音がここににいること自体は認めてくれる気になった……のかな？」

「ええ。みーくんの願い事でもなんでも叶えればいいよ。ただし……」

…万が一にもみーくんが不埒な願い事をしたら……」  
「ないない！ そんなこと絶対ないから！」

\*\*\*

ようやくひなたが帰ったのは、それから1時間ほど経ってからだった。朝の『スーパヒーロータイム』を我が家で最期まで見ていたからだ。まったくそんなのは自分の家に帰ってから見ればいいのに。

ひなたは帰り際に、思い出したように本来の用件を俺に告げた。  
曰く、天気がいいからどこかに出かけよう、と。

「今から帰って支度してくるから。みーくんもすぐ出られるように準備しててね」

まったく、押しの強いひなたであった。

まあ、言い出したら一直線なのがひなただから、いつもの通りなんだけど。

俺はひなたを玄関まで見送ったあと、台所で食器の後片付けをしている雨音を誘うことにした。雨音一人だけをのけ者にするのは、やはり気が引ける。

「ねえ、雨音さえよければ、雨音もいつしよにどこかに遊びに行かない？ 天気もいいし、森林公園なんか気持ちいいと思うんだ」

雨音はちよつと考えるようなそぶりをみせて、

「そうですね……でも、わたし、雨の精霊ですから、ちよつとした事で雨を降らせちゃいますよ？」

「例えばどんなことで？」

「悲しい事があったときとか……」

「それなら大丈夫だよ。悲しい思いをさせることなんて無いから」  
雨音は僅かな迷いの色をその瞳に滲ませていたが、やがて、意を決したように俺の目を正面から見据えて答えた。

「分かりましたっ！ これってその、デートなんでしょうかつ！」

耳まで真っ赤になっている雨音は、それでも俺の目から視線を逸らさずに、まるで睨み付けるようにして俺の顔を見つめる。両の手を胸の前で握りしめ、必死の形相だ。胸はがっかりするほど平坦だけだ。

「まあ、広義のデートには入るかもしれないな。ひなたも一緒だから、本当にデートと言えるかどうかは微妙だけど。よし、善は急げだ。森林公園はここから歩いて三〇分くらいの所にある。今が八時半だから、ゆっくり行っても九時には着けるな」

「だったら一時間ほど待って下さい！ わたし、お弁当つくりますっ！」

「それは構わないけど、でも面倒じゃない？」

雨音は満面の笑顔を浮かべ、こう言い切った。

「誰かに料理を食べてもらうの、嬉しいですからっ！」

「そう？ それじゃ、ひなたには俺から電話しておくね」

俺は自室に戻って、机の上に置いてあった携帯電話を手取る。短縮ダイヤルの一番最初に登録してあるひなたの番号を呼び出し、発信。数回の呼び出し音のあと、ひなたの声が携帯のスピーカーから聞こえてきた。

「ひなたか？ 雨音が弁当を作ってくれるっていうから、出発を少し遅らせたんだけど……」

『お弁当！？ そんな餌でみーくんを釣ろうっていうのね、あの貧乳デンプ女！ いいよ、ボクもお弁当作る！』

俺はとんでもない間違いを犯してしまったことに気づかされた。

頭から血の気が引いていく音が聞こえる。ひなたの性格を考えれば、『雨音が弁当を作る』と聞いて黙っているわけがないのだ。

「いいい、いや、ひなたさん？ 雨音が人数分弁当を用意してるから、あまり多くても食べきれないよ？ だから……」

『作る！』

「……はい」

俺はマリアナ海溝のチャレンジャー海淵より深く後悔しつつ、電

話を切った。あまりに深い後悔のため、俺の寿命は水圧でどんどん縮んでいきそうだ。ひなたの弁当を食べたら、確実に、

……父さん、天国の母さん。俺は今日死ぬことになるかも知れません。

一時間半後、俺たちは家を出て一路森林公園へと向かった。

梅雨の中休みといったところなのか、空には雲一つ無い。

雨音はどこからか出てきた白の日傘をさして、俺の右隣を歩いている。

左隣にはイラスト入りのＴシャツに白のショートパンツにスニーカーというカジュアルな出で立ちのひなたが陣取っている。ちなみに、俺はカーゴパンツにグレーのＴシャツという地味きわまりない格好である。その上、雨音には小ぶりな風呂敷包みを、ひなたからはバスケットを押しつけられて両手が塞がっている。要するに荷物持ちである。

女の子二人と並んで歩いているというのに、俺はちっとも嬉しくない。むしろ全力でこの場から逃げ出したいくなるのは何故だろう。

しかし、こうして雨音をみると、まるでどこかいいところのお嬢様のようなだ。

だが、雨音は人間じゃない。正真正銘、雨の精霊だ。

信じられないような昨夜の体験を思い出す。あれをすんなりと受け入れられた俺という人間は、実はすぐく器の大きいヤツなんじゃないだろうか？

そんなことを思っていると、雨音が日傘をくるくる回しながら問いかけてきた。

「そういえば……最後の願い事、決まりましたか？」

「いや、ただだけ……。急がないとダメ？」

「いえっ！ ゆっくり考えていただいて結構です」

そういうと、雨音は柔らかな笑顔を俺に向けてくれた。晴れた青空のように澄んだ深い色の瞳が、俺を映している。最後の願いごと。

それを叶えたら、雨音は俺の前から消えてしまう。ただそれだけのことだし、昨夜はすぐにも消えてしまつて欲しいと思つていた。

だけど、いざ『最後の願い』を考え出したら、ちつとも自分のして欲しいことや、欲しい物が見あたらなかった。雨音はゆつくり考えればいいと言つてくれた。そうだな、自分が本当は何が欲しいのか、何を叶えてほしいのか、じっくり自分自身と向き合つのも悪くない。

時間はたっぷりあるんだ。今は雨音の言葉に甘えよう。

## 第一章

### みーくんと兩音とひなた

#### 1（後書き）

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せください。



## 第一章

### みーくんと兩音とひなた

#### 2 (前書き)

ちよつと遅くなりましたが、本編一章の2をお送りします。楽しんでいただけたら幸いです。

1 1 / 1      1 3 : 4 6      加筆修正しました。

やがて、道は上り坂へと姿を変えていく。

森林公園はちよつとした山の中腹から頂上にかけて広がっているのだ。当然、歩いて行こうと思えば上り坂を歩かざるを得ない。バスも通っているのだが、三〇分に一本しか来ないので、若い俺たちは自分の脚であるいていくことにしたのだ。ただ、途中でバスに抜かれたのはちよつと凹んだけど。

軽いハイキングコースのような遊歩道を上っていると、眼下に街の風景が広がり始める。普段住んでいる街をこんな形で見下ろす事は滅多にないので、俺は自然と自宅のある辺りを探していた。あつたあつた。あの瓦葺きの屋根の家がうちで、その隣に立っている赤い屋根の家がひなたの家だ。

「いい景色ですね！ 空の上から見るのとちよつと似てるかも」

白い日傘をくるりと回し、俺の横を歩く雨音が言う。確かにいい景色だ。でも、雨音の普段いるであろう天空からの眺めとは、きつと比べものにならないだろう。

さらにしばらく上り坂を歩いて行くと、前の方に森林公園の入り口が見えてくる。

特に遊ぶ場所があるわけでもなく、ただ自然が豊かに残っているというだけの公園だ。そのてっぺんにある展望広場は見晴らしがとてもよく、空気の澄んだ日にはかなり遠くの山々まで見渡せるほどだ。

券売所で三人分の入場料を支払って、俺らはゲートをくぐる。この時期だと紫陽花が綺麗ですよと、券売所のおばさんが教えてくれた。

雨の精霊の雨音と、紫陽花の取り合わせ。そして今日は抜けるような青空。カメラを持ってくるんだったと後悔したが、そもそも精霊は写真に写るのだろうか？ でも、券売所ではちゃんと雨音の分

の料金取られたしなあ。

園内に入ると、早景色とりどりの紫陽花が俺らを迎えてくれた。一体何本くらい植えられているのだろう。順路にそって、森林公園を散策する。樹の葉がが日の光を遮ってくれるので、雨音は日傘を畳んでいた。

木漏れ日が時折雨音の白い肌を照らし出す。それが何故か俺にはとても眩しく感じられた。

「みーくんはずいぶん熱心にその子の顔を見てるようですねえ」  
ひなたの冷たい声が俺に投げかけられる。

確かに抜けるように白い雨音の肌に見とれていたのは事実だが、決して変なことを考えて居たわけじゃないぞ？ 少なくともちよつと、ほんのちよつとドキドキしたただけだ。

「みーくん、やっぱり最後の願い事はエッチなことにしようとしてるんじゃないの？」

「そ、そんなことないぞ！ 大体、俺にそんな度胸があると思ってるのか、ひなたは！」

ひなたは一瞬ぼかんと惚けた顔をしたあと、大口を開けて大爆笑してくれた。

「そりやそうだ！ みーくん甲斐性なしだもん！ そんな大それた願い事なんて無理だよな」

「わたしには彼がそんなに甲斐性がないとは思えないんですが……」

「騙されちゃダメよ。みーくんは優しい男の皮を被った単なる優柔不断男なんだから」

「そうなんですかつ？ それにしては昨夜、初対面で激しいSプレイをわたしに……」

「Sプレイってなんだよ！ それは、やりどころのない怒りを極厚の雑誌に乗せて頭を叩いただけじゃないか！ 人聞きの悪い事いうな！」

「そうやって言い訳するあたりが男らしくない」

俺はがっくりと肩を落とすと、「もう好きに言っってください」

とつぶやいた。

何だか目の前が霞んでいるけど、これはきつと汗が目に入ったからであって、決して涙ではないはずだ。

\*\*\*

森林公園には、開けた湿地もあり、そこではハナシヨウブが一面に紫の花をつけて咲き誇っていた。雨音もひなたも、そして俺も思わず感嘆の声を上げてしまうほどに綺麗だった。ホント、カメラを持ってこなかったのは大失敗だ。

ハナシヨウブの園を抜けると、今度はヤマユリが待っていた。可憐なヤマユリの花に、これまた清楚な外見の雨音がそつと手を伸ばす。そういえば、ユリの花は結婚式のブーケなんかにもよく使われると聞いたことがある。なるほど、ジューンブライドにはぴったりの花というわけだ。

花といえば、一応現在の俺は『両手に花』状態と言えなくもない。誰が見たって可憐な雨音と、認めるのはなんかシャクだが決して不細工じゃないひなたが、俺を挟んで歩いているのだ。一六年生きてきて、もしかしたら始めてのシチュエーションなんじゃないだろうか。

「ん？ なに？ みーくん。ボクの顔に何かついてる？」

不覚にもひなたの横顔に見とれていた俺の視線に、彼女は敏感に気づいていた。くそつ、またこれをネタにしてきつとからかわれるに違いない。

ところが、ひなたはいつも俺をからかう時の意地のわるい笑顔を浮かべることもなく、俺から視線を外すと、ユリの花を愛おしそうに見つめる雨音の後ろ姿を見つめていた。

「……確かに綺麗な子だね……。ボクじゃかなわないかも……」  
「え？ 何か言ったか？」

ひなたの呟きは、俺の耳に届くことなく風がどこかへ運んでいっ

てしまった。俺の方を振り向いたひなたは、少し陰りはあるけれどいつもと変わらない彼女らしい笑顔を見せて俺に言った。

「内緒！ 聞こえなくていいんだよ。ボクの独り言だからね！」

「なんだよそれ。ひなたらしくないぞ？」

「いいんだよー。それよりそろそろ展望広場に行かない？ あそこからだとかかなり遠くまで見渡せるからねー」

ふと時計をみると、時間は間もなく正午になろうとしている。展望広場にはテーブル席もあるし、昼ご飯を食べるのにも丁度いい。俺はまだ名残惜しそうにヤマユリの花を見ている雨音にそつと声をかけた。

「そろそろ移動しよう。ひなたが腹減らしてるんだ」

「ちよつと！ ボク、そんなこと一言も……」

途端にひなたのお腹がぐうつと大きな音をたてる。俺は笑いをこらえながら、雨音に目配せした。「ほらね」と。

「ううううつ……。こんな時にお腹が鳴るとは。ひなた一生の不覚！」

「まあまあ、とりあえず展望広場へ行こう。雨音がお弁当作ってくれてるし、ひなたも……」

俺は恐ろしい現実を思い出していた。そう、ひなたも弁当を作ってきているのだ。あのひなたが、弁当を、作ってきた。間違いなくそれは食べ物以外の何かに進化しているに違いない。

俺は左手に握られたバスケットの取っ手をぎゅうつと握りしめた。そうしないと手が震えてしまいそうだったのだ。

「みーくん、何かすごく失礼な想像してない？」

「ななな、何のことでしょう、ひなたさん。いやあ、楽しみだなあ、ひなたのお弁当！」

本心なんか言ったら、必殺の『ひなたストレート』で俺の寿命がみるみる縮んでしまう。なんとかしてひなたの作った化学兵器、もとい、弁当を食べることは回避しなければならない。

考える、考えるんだ！

「みーくん、なんだか顔色悪いですよ？ 大丈夫ですか？」

雨音が言う通り、多分俺の顔は真っ青だろう。脂汗がじわりじわりと滲み出てくる。考えれば考えるほど、今回の回避ミッションは困難さを増していく。このままではひなたの作った大量破壊兵器を口にすることになる。

「だ、大丈夫だよ！ とにかくっ！ 展望広場へ行こう。その坂を上ったらすぐだから」

俺に残された時間は、この坂道を登り切るまでの僅か数分。その間になんとか脱出する手立てを考えなければ。

\*\*\*

時間という物は無情に過ぎていくもので、展望広場に続く坂道はあっという間に終わり、今俺は、広場にあるテーブル席で二つの弁当を前に自分の今朝の大失敗を呪っていた。あの時、雨音が弁当をつくるなんて言わなければ、ひなたも対抗意識を燃やしたりしなかっただろう。

「さあ！ ボクの弁当は……じゃーん！ サンドウィッチでした！  
！ ちよつとお母さんにも手伝ってもらったけどね」

俺は恐怖のあまり目を開けられない。どんな恐ろしいことになっているのか、想像するだけで背中に冷たい物が伝う。それと同時に翌日の新聞の社会面が頭に浮かんだ『白昼の惨劇 弁当に毒物』『痴情のもつれによる犯行か』等々……。

「うわあ！ すっごく美味しそうですよっ！ ひなたさん、お料理得意なんですか？」

……なに？ いま何と言った？ 『すっごく美味しそうです』だって？ 俺はごくりと硬い唾を飲み込むと、覚悟をきめて目を開いた。そこには、ごく普通のサンドウィッチがバスケットに詰められて置いてあった。馬鹿な！ これをひなたが作っただって？ 有り得ない！ いや、普通なのは外見だけに違いはない。きつと口に入れた

が最後、胃液を出し尽くして最後は血反吐を吐くような苦しみを味わう事に……。

「じゃあ、ひなたさん、いただきますねっ！……美味しい！みーくんも食べてあげてください！本当に美味しいですよっ！」

驚愕の光景がそこにあった。あのひなたの作ったサンドウィッチを、雨音が美味しそうに食べている。雨音の料理の腕は確かだ。恐らく味覚も同様だろう。だとしたら、このサンドウィッチは人の食べ物として成立していることになる。

俺は震える手でトマトとレタスのサンドウィッチをつまむと、目を瞑り、普段は信じもしない神に祈り、そして覚悟完了。がぶりと一気に半分ほどを口にねじ込んだ。

「……うぐうっ……！」

口の中にも何とも言えない酸味と甘さと渋みが広がっていく……！

これは、いったい何の味だ！？ トマトの酸味は分かる。だが、このまったりとした甘みは一体……。ふと雨音が食べるサンドウィッチを見ると、それはシンプルなハムとレタスのものだった。あれは普通の味なのだろう。だが、この野菜のサンドウィッチはどうだ！ 人間の食べ物にはほど遠い味だぞ！？ 咀嚼するたびに舌に、

脳に、不味いという信号を送ってくる。胃が痙攣して毒物を吐き出そうともがいている。このサンドウィッチは危険だと叫んでいる！

「それじゃあ、こっちの野菜のサンドウィッチもいただきますね」

雨音が件のサンドウィッチに手を伸ばす！ ダメだ雨音！ それは危険物だ！

「はむ。もぐもぐ………うっ」

遅かった。みるみる雨音の顔色が変わっていく。血色のよかった桜色の頬は、今や青紫色に染まり、笑顔のまま固まった顔には、びっしりと脂汗が浮かんでいる。

「そっか、おいしいか！ るくに味見もしてなかったけど、やつぱり作って来てよかった！ どれ、それじゃあボクも一ついただきます！ はむ……もぐもぐ……うっ」

どうやらひなたのヤツも野菜のサンドウィッチを引き当てたようだ。自分でも「うつ」と言うほどの味なのだから、俺たちがどういう状況に陥っているかはわかるだろう。」

雨音の顔色に比例するかのように、空には黒い雲が立ちこめ、稲光が走り始めた。そしてまもなく大粒の雨が降り始める。展望広場で昼食をとっていた家族連れやカップルなど客は、慌てて荷物を纏めて屋根付きの展望席へと移動していく。だが、俺たちは動けない。動いたら最後、胃の中のを全てぶちまけてしまいそうなのだ。ふとひなたの方を見ると、彼女は白目をむいて気を失っていた。まずい！と思う間もなくひなたは椅子ごとうしろにぶつ倒れ。びくんびくんと痙攣しはじめた。どうやら何も考えずに飲み込んでしまったようだ。口からはなにやら泡を吹いている。

「うええ……。凄い味ですう……。はっ！ ひなたさん！？」

「うつうつ……。動いたら戻しそうだ……。まずい、ひなたが息をしていない！」

「吐瀉物が気道を塞いでいるんですっ！ はやく気道を確保しないと！」

そういつている間にもひなたの顔色は見る間に紫色に変わっていく。でも、気道確保っていったって、吐いたものが詰まってるんじや普通のやり方では気道は開かないだろう。だが、早くしないとひなたが死んでしまう！ 死ななくても脳に酸素が行かなければ一生ものの後遺症が残りかねない。

「わたしが精霊の力……。『法術』で蘇生措置を試みます！ 一時的に周囲の時を止めますよ！」

雨音はそういうと、まだ紫色の顔で言葉の旋律を紡ぎはじめた。時折言葉が途切れ、うつという声が混じる。まったくひなたの殺人兵器の威力は抜群だ。やがて、遠巻きに俺たちを見ていた客たちの動きが止まる。まるで石像のように動かなくなったのだ。

「時間が……。止まった……。？」

自分の周りで雨粒がひしゃげた球形になって静止している。その



中で、雨音はその身体に白い光を帯びながら、独特の旋律を伴った言葉を、まるで音楽のように織りなしていた。

ようやく詠唱が終わり、雨音の放つ光が俺たち三人を包み込んだと思うと、白い爆発となって一瞬で消えた。周囲を見ると、他の客の動きで時間の流れが元に戻ったのがわかった。不思議なことにあるほどむかついていた胃がすつきりとしている。ずぶ濡れだった服もすっかり乾いてしまっていた。

「ついでにわたしたちの身体も浄化しました！ 毒物……じゃなかった、ひなたさんのサンドウィッチも無害化してありますよ！」

なるほど、ひなたの蘇生のついでに俺たちも浄化してしまったのか。そうだ！ それよりひなただ！ さっきは呼吸が完全に停止していた。死の一手手前まで行っていたひなたは、果たして無事なのだろうか？

「うつつ……なんか後頭がズキズキする。あれっ？ みーくん、どうしたの？」

「ひなた……よかったなあ。お前はもう少しで自分の作ったサンドウィッチという名の殺人兵器で死ぬところだったんだぞ？」

「殺人兵器ってなにさ！ そりゃボクは料理苦手だったけど、その言い方はあんまりだよ！」

「だって、お前、今死にかけてたんだぞ？ あれが殺人兵器じゃなくて何だって言うんだ」

ひなたは頬を膨らませてそっぽを向きながら、だけど目線だけは俺の方をむけてボソボソと呟いた。

「ボクだって……特訓したんだもん。みーくんに美味しいもの食べてもらえるように……。何度も何度も失敗して、指を切ったりして……」

「ひなたさん、頑張ったんですねっ！ すごいですっ！ みーくんもちゃんと褒めてあげなきゃだめですよ！」

ひなたの拗ねた視線と、なんだか妙な迫力のある雨音の視線が俺に集中する。褒めろったって、雨音もさっき死ぬ思いをしただろう

に。一体何をどう褒めろっていうんだ？

「……まあ、なんだ。努力は認めるよ」

「えっ？」

「すっげー不味くて死にそうだったけど、それでも俺のために作ってくれたものだからな。死にそうな思いしたけど、吐き出さずに飲み込んだぞ」

ふてくされていたひなたが、ゆっくりとお日さまのような笑顔になっっていく。

目のはしに何か光る物をためながら。

「あ……ありがとう、みーくん」

一面の黒雲に覆われていた空は、いつの間にか晴れはじめていた。あれだけ土砂降りだった雨もいつの間にか止んでしまっている、  
『わたし、雨の精霊ですから、ちょっとしたことでも雨を降らせちゃいますよ？』

出かける前に雨音が言っていた言葉が俺の脳裏によみがえる。

そうか、今のは雨音の涙みたいなもんなのかもしれないな。

\*\*\*

雨が上がった後、俺たちは屋根付きのバンガロー風のテーブル席に移動していた。雨で台無しになってしまったひなたのサンドウィッチの代わりに、俺たちは雨音謹製の行楽弁当を堪能している。いや、台無しになっていたのは調理直後からかわらないんだが。

「あ、ボクちよつと売店に行ってくるね」

そう言い残すと、ひなたはボクと雨音をテーブル席に残し、少し離れたところにある売店へと歩いて行った。

「ねえ、雨音。さっき急に雨が降り出したのって……」

「あ、あれですか。わたしの感情がコントロール出来なくて、涙が出ちゃったんです。家を出る前にも言いましたよね？　ちよつとしたことで雨を降らせちゃうって」

やっぱりそうだったか。まあ、すぐ止んだからよかったけど。

「悲しくなくても涙が出たら雨降らしちゃうのか。うーん、さすがは雨の精霊……」

「でも、今の雨がわたしの降らせたものだってひなたさんに言っても、きつと信じてはくれないでしょうね」

雨音は少し寂しげな目でひなたの持ってきたバスケットを見ている。雨に濡れたサンドウィッチは、もう食べられることもない。もつとも無事だったとしてももうご免だが。

「それはまあ、仕方ないかもしれないな。あいつ、昔からUFOとか幽霊とか信じないやつだったから。テレビの心霊特集とか見ながらゲラゲラ笑ってるんだぜ。俺なんかその晩は怖くてトイレにも行けなかったってのに」

「そういえば、どうしてみーくんはわたしが雨の精霊だってあつさり信じてくれたんですか？」

あれだけ派手な登場をして、魔法のような力を見せつけられりや、ひなたのような石頭じゃなきゃ信じるしかないだろうに。

「ま、そんな存在がこの世にいてもいいかな、と思ったただだよ。最初は夢だと思ったけどさ」

そんな話をしていると、両手で器用に三つのソフトクリームを持つたひなたが戻ってきた。

「はい、これはボクからのおごりだよ！ 売店で子供が買ってるの見て欲しくなっちゃった。はい、天音ちゃんにはボクからのお礼。かばってくれて嬉しかったよ！」

「うわあ！ これ、『そふとくりーむ』っていいですね？ わたし、一度食べてみたかったんです！」

雨音に尻尾がついていたらきつと千切れんばかりに激しく振られていることだろう。雨音に続いて、俺にもコーンの上にたつぷりと盛られたソフトクリームが手渡される。

「これはボクからのお詫び。その……不味いもの食べさせてごめんなさい」

すこししゅんとした様子で、ひなたが言う。俺はもっとはやくひなたの努力に気づいてやっていればよかったと少し後悔していた。そんな俺の気持ちを察したのか、ひなたは「まだまだ料理は勉強中だけだね！」と明るく言うのだった。

## 第一章

### みーくんと兩音とひなた

#### 2 (後書き)

いかがでしたか？ もしよろしければ感想などお寄せ下さい。

## 第一章

### みーくんと兩音とひなた

#### 3 (前書き)

本編第一章の3をお送りします。楽しんでいただければ幸いです。

## 第一章

### みーくんと雨音とひなた

3

「でね、みーくんったらその時……」

「そうなんですかつ！ それは意外な一面です！」

俺を挟んで座っている雨音とひなたが仲よさげに言葉を交わす。

数時間前、初めて出会った時の二人は、とてもじゃないけどこんな穏やかな会話をできる関係になるとは思えなかった。

「……女の子ってのは謎に満ちた生き物だ……」

「え？ なにかおっしゃいましたか？」

「ボクも是非聞かせて欲しいな。誰が謎に満ちた生き物なのか」

「聞こえてるじゃないかッ……」

「ぶっ……ぶははっ！ みーくんが何を不思議がってるか、ボクにはちゃんと分かってるよ」

「なにが不思議なんですか？」

「みーくんはね、ボクたちが仲良くしてることが不思議なんだよ。」

そりゃ、ボク自身もどうしてだろうって思うけど、どうしてだか雨音ちゃんを悪く思えないんだ」

「不思議ですね。わたしも今朝は『なんて失礼な人だろう』って思ってたんです。でも、いまはひなたさんのいい所がたくさん見える気がしてしかたがありません」

梅雨の晴れ間の心地よい風が吹き抜ける。

俺の目の前で、雨音とひなたはしっかりと握手していた。

「雨の精霊云々を信じたわけじゃないけどね。雨音ちゃんは悪い子じゃない。それだけは信じられるよ」

「信じてもらえなくても、わたしは雨の精霊です。でも、ひなたさんに無理に信じてもらわなくても、今の言葉だけでわたしには十分です！」

やっぱり女の子って生き物はよく分からない。あれだけ張り合っていたひなたが、雨音の手を取ってにこにこしている。雨音もそう

だ。『デンパ女』だのなんだのと散々なことを言われたのに、そんなこと初めからなかったかのように柔らかな微笑みを浮かべている。もしかしたら、女の友情と男の友情は全く別物なのだろうか。

「やっぱり女は分らない……」

俺は柔らかな陽の光を浴びながら、テーブルに突っ伏して、ゆっくりと微睡みへと落ちていった。

\*\*\*

「……くん、みーくん！ そろそろ閉園時間になりますよ！」

遠くから俺を呼ぶ声が聞こえてきた。閉園時間？ 何のことだろう。もう少し寝かせて……。

「困りました……。みーくん全然起きてくれません」

「なあに、こういうときはとっておきの手があるのさ。そう、あれはまだ小学生のころ。ボクとみーくんは一緒にお風呂に……」

「やめろッ……」

「ほらね、すぐ起きたでしょ？」

白い歯をみせてニヤニヤ笑うひなたと、何を想像したのか頬を赤らめる雨音。そうだ、俺はひなたに数々の弱みを握られている。今の話もその一つだし、他にも医者さんごっこをしたときの話とか……。まずいぞ、そんなことを雨音に知られるのはすごくまずい気がする。

「そうだ、閉園時間だつて？ じゃあ、すぐ帰らないとなつ！」

強引に話題の転換を図ってみる。ひなたは相変わらずニヤニヤと笑いながら俺をみている。雨音は頬を赤らめながらも、何かを思いだしたように顔を上げた。

「そ、そうでしたっ！ さっき、園内の放送で間もなく閉園時間です、って」

六月の日はまだ高く、まだ日没までは結構な間がある。だが、確かに太陽は西に傾いでいた。



「よし、今日はもう帰ろう。……ところで、二人に聞きたいんだけど」

「なんだい？ みーくん。寝てる間に寝言でボクに愛の告白でもしなかったか、とか？」

これも俺の弱みの一つだ。小さい頃、「ひなたちゃんをおよめさんにする！」などと口走らなければ、一〇年以上経った今になってこんな風にかかわれずに済んだものを。幼い頃の自分の愚行に、思わず近くに置いてあった大きな岩めがけて頭突きを連発したい衝動に駆られるが、とりあえず最大限の自制心をもって愚行を重ねることを回避する。

「……俺、何時間くらい寝てた？」

「そうですね、二時間くらいじゃないでしょうか？」

「うんうん。ちょうどその位だね。おかげで雨音ちゃんにみーくんのことを色々とレクチャー出来たよ」

「レクチャーってなんだよ！ 人の恥ずかしい過去の話を本人の居ないところにするなんて、ひなた、お前卑怯だぞ！」

ひなたは心外だなというような表情をみせたあと、軽く溜息をついた。

「みーくんの目の前で話してたけど、みーくん止めなかったじゃないか」

「意識がないのに止められる方がおかしいだろ！」

「あ、あのっ、ひなたさんは決してみーくんのことを悪く言ったりはしてませんかっ！」

俺の剣幕に押されていたのか、それまで俺とひなたのやりとりを呆然と見ていた雨音が割り込んできた。

「みーくんの小さい頃の話とか、今の学校のお話とか、そんなことだけでしたから！ だからひなたさんを怒らないであげてくださいっ！」

だから、小さい頃の話はそれだけで十分俺の弱みになるんだよ……。だが、雨音はそんなことには少しも気づかない様子で、「ひな

たを怒らないで」と繰り返す。

「あー、もう！ 分かった分かった！ 分かったから雨音も頭あげて！」

「本当ですか？ うっ、よかったっ……。っく……」

にわかに空が曇りだし、ぽつり、ぽつりと冷たい滴が落ちてくる。雨音の感情のコントロールがきかなくなり、その大きな瞳からはぼろぼろと透き通った涙の滴が頬に落ちていく。涙の量に正比例して雨の勢いも強くなっていく。やがて空はどんよりと曇り、ばらばらと大きな音をたてて本降りの雨になってしまった。

「うわあ、さっきまで全然降る様子なんてなかったのに！ ボク、傘持ってきてないよ！」

「とにかく、屋根のあるところまで行こう！」

俺とひなたは、泣き止まない雨音を両方から抱えるようにして、雨の中を近くの売店まで走った。土砂降りの雨はあつという間に俺たち三人を濡れ鼠にしまった。売店で閉店作業をしていたおばちゃんが、店の奥から乾いたタオルを引っ張り出してきて貸してくれる。

「雨音、雨音。もう泣かないで。俺はちつとも怒ってなんかいない。ほら、この顔のどこが怒ってるのさ。ね、もう泣かないで」

俺は売店のおばちゃんに礼を言いに行ったひなたの目を盗んで、雨音の耳にささやきかける。ぼろぼろ、ぼろぼろと涙をこぼしながらも、雨音は俺の方を向いてくれた。

「本当に、ひなたさんのこと怒ってませんか？」

「もちろん。本当だよ」

「あ、ありがとうございまふ」

涙が鼻に抜けたのだろう。鼻声になりながら雨音は俺に頭を下げた。しばらくそうしていた雨音だったが、次に顔を上げたときには、すこし目のはしに涙が残っているものの、眩しいほどの笑顔で俺を正面から見つめてくれた。

「ぐすっ。みーくん、ちょっと嘘つきです」

「なんでさ！」

「出かける前に『悲しませるようなことはしない』って言ってました。でも、わたし泣かされちゃいました」

雨音の笑顔が輝きを取り戻すのに合わせるように、雨の勢いはおさまり、雲は晴れていった。

「いやあ、すごい雨だったね。雨音ちゃん、髪痛んじやうからちゃんと拭いておかなきゃだめだよ。それと、帰ったらすぐお風呂。夏風邪は治りにくいからね」

「雨音のことは気にしてるようだけど、俺には何もないのかな、ひなたさん？」

「男は雨に濡れてる方が格好いいんだよ。昔の紳士は傘もささなかつたっていうじゃない」

「いつの時代の話だよ！」

俺の大声もどこ吹く風。ひなたは空を眺めると、

「よし、雨は降りそうにないね。でも油断できないから……。はい、これ」

ひなたは両手に三本の傘を持っていた。コンビニで売ってるような安っぽいビニール傘だ。

「おばさんが店の奥から出してくれてたんだよ。帰りに降られるといけないから、って」

黙々と閉店作業を続けるおばさんの後ろ姿に、俺は声をかけた。

「あの、タオル貸していただいただけじゃなく、傘まで貸して頂いて……。本当にありがとうございます」

おばさんは振り向きもせず、ゴミの仕分けをしながら、それでも返事をしてくれた。

「どうせ誰も使わない傘なんだ。あんたたちに使ってもらった方が傘のためでもあるさね」

「必ず返しに来ます。三人で」

「ふん。あてにしないで待ってるよ」

店を出ると、辺りはすっかり金色の陽の光に包まれていた。売店のおばさんがゲートに「雨宿りしている客が三人いる」と連絡してくれていたので、俺たちはなんのお咎めもなく閉園時間をつくに過ぎた森林公園をあとにすることが出来た。無愛想だけど優しいおばさんに感謝だ。

帰り道の長い長い下り坂。まだアスファルトの路面は乾いていない。白い日傘をさして俺の半歩前を歩く雨音の後ろ姿を見つめながら、俺は考える。雨音の言う通り、雨音が悲しんだり心がコントロール出来なくなると、雨音は雨を降らせてしまうらしい。

それも、どうやら『悲しい時』だけではなく、『嬉しい時』でもあつという間にざんざん降り of 雨模様になってしまう。でも、普通に喜んでた時は大丈夫だったな。ということは、やっぱり自分の気持ちの動きを制御出来なくなったとき、雨音は雨を降らせてしまうんだ。

「みーくん、なんか視線で雨音ちゃんを犯そうとしてない？」

「な、なにをいうんだよ！ ちょっと考え事してただけだよ！」

ひなたがいかにも疑わしそうなジト目で俺を上目遣いに見上げてる。

「ま、どうせ甲斐性なしのみーくんには雨音ちゃんをどうこうすることなんて出来やしないでしょうけどねー」

「ひなた、お前は俺が平気で女の子を押し倒したり、あんなことやこんなことが出来るヤツだった方がよかったのかい？」

「えっ……。それはその……。ボクが相手なら……」

なんだか知らないが、ひなたは急に顔を赤くしたと思うと、なにやら口の中でごにごにと呟いて黙り込んでしまった。

「わからないなあ。いつもみたいにハッキリ言えればいいじゃないか」

「うるさいなあ！ ボクにだって言いたくても言えないことくらいあるんだよっ！」

いきなりキレられた。俺がなにか悪い事でもしたか？　こういうとき、昔から先に折れるのは俺だった。俺が折れて謝ると、ひなたは「仕方ないなあ、みーくんは」などと言いながらお姉さんぶった態度をとるのだ。

「ごめんごめん。そうだよな。ひなたにだって言いたくない事くらいあるよな」

「言いたくないっていうか、言いたくても言えないんだけど……」  
言いたくても言えないこと？　ますます分からない。ひなたは俺が雨音にえっちな願い事することを心配してるんじゃないのか？  
「とにかく！　みーくんは甲斐性なしで度胸もなくて優柔不断で、でもそれでいいの！　この話はこれでおしまい！」

強引に話を締めくくると、ひなたは前をいく雨音の隣に並んでなにやら楽しげに話をしていた。俺は二人のから少し後を、空を見上げながらぶらぶらと歩いていた。森林公園を出るときには金色だった空は、赤から群青色のグラデーションに染まっている。売店のおばさんが貸してくれた傘は、どうやら出番が来ることなく終わりそうだ。

やがて坂道が終わり、住宅街に続くバス道路に出る。ひなたと雨音のガールストークはとどまるところを知らず、いまだにかしましく続いている。ちなみに帰りにもやっぱりバスに抜かれた。最終便のバスが若干遅れてたようだ。とことん凹む。

「でね、うちのガッコ、メチャクチャ変わってるのよ。文武両道か何かしらないけど、男女問わず必ず武道の授業を受けて、卒業までには全員が有段者よ？　体育専門の学校かっての」

「大変そうですね。でも、女の子で武道の有段者なんて、ちょっと格好いいかもです」

「ボクはなぎなたを選択したんだけどね、剣道と違ってスネを打つてもいいんだよね」

「へえ……。でも打たれたら痛そうですね」

「痛いよ〜」。防具の上からでもじんじんするぐらい。雨音ちゃん

なんかはそうだなあ、合気道とか似合いそう。袴姿なんかもう最高に可愛いと思うわ」

「可愛い……ですか。格好良くなりたかったんですけど、無理ですよ。そういうばみーくんは何を選択したんですか？」

唐突に俺に話しが振られてきた。ボンヤリしてたから、ろくに話の内容なんて聞いてない。

「だから、みーくんは何を武道の選択科目で選んだのか、つてきてるんだよ。まあいいや。みーくんはね、中国武術を選択したんだよ」

「中国武術？ カンフーっていうアレですか？」

雨音がカンフーっぽいポーズを作りながら俺に問う。

俺が中国武術を選択した理由。それは単に『楽そう』だったからだ。太極拳のどこに激しい練習や厳しい修行のイメージがあるだろうか。普通はないよね？ 健康体操のイメージだよね？ ところがそれは大間違いだったのだ。

「楽そうだと思って選択したら、とんでもなくキツイ練習させられて、最初の頃なんか全身筋肉痛でまるでロボットみたいな歩き方だったもんね」

ひなたはきつとあの頃の俺の姿を思い出しているのだろう。笑いをこらえるのに必死といった様子だ。いいよいいよ。思う存分笑えよ。我慢は健康にわるいぞ。

「雨音ちゃん、みーくんの太腿触らせてもらったことある？」

「いえ、ありませんけど」

「みーくん！」

「はいはい。どうぞご自由に」

中国武術の基礎練習には、站椿功たんとしゅうこうというのがある。何をするのかというと、腰を落としてじつと立ち続けるだけという、我慢大会のような練習だ。コーチいわく「站椿功は我慢比べじゃない。ちゃんと意識をするところを意識しないと何の効果もないぞ」とのことだが、まだ俺は站椿が我慢大会じゃないという確信は持てないでいる。

「本人の許可が出たから、ほら、ここ触ってみて」

「え？ こ、これ、全部筋肉ですかっ！？」

站椿功は確かに足腰を鍛えるのもの凄く役に立つ。でも脂汗流し、膝をガクガクいわせて立ち続ける姿はたぶん滑稽以外のなにものでもない。雨音はしゃがみ込むと、ジーンズの上から俺の太腿を触りまくる。なんか顔が上気してるような気がするの、は気のせいかな？  
ぽつり。頬に冷たい滴が当たる。

「まさかっ！」

俺の脚をさする雨音の表情は恍惚として、せつかく精緻を極め尽くしたつくりの顔が、だらしなく、これ以上ないくらいだらしなく緩んでいた。もしかして……き、筋肉フェチ？

雨音は自分の感情をコントロール出来ないときに雨を降らせてしまふ。そう、いま、この時の雨音は、筋肉という俺には縁がなさそうに思えた漢の魅力にあらがえずにいる。この状態は危険だ！

「また雲行きがあやしくなってきたね。傘かりてきたの、正解だったでしょ、みーくん」

「ああ、すぐにさした方がいいぞ。特大の土砂降りがくるかもしれん」

「まさかあ。でもぽつぽつ降り始めてるから、一応さしておくかな」  
俺とひなたが傘を開いた瞬間、天の底が抜けたかのような豪雨が俺たちを包んだ。傘をさしていなかった雨音は、唐突に降り出した雨でずぶ濡れになって、ようやく我に返ったようだ。

「え、え、え、え？ あ、わたし、またやっちゃいました？」

無言で頷き、傘を手わたす俺。ひなたは突然の豪雨と強い風に、傘を持って行かれそうになりながら、それでもキャーキャーいいつつ状況を楽しんでいた。雨音は慌てて深呼吸して自分の心の暴走を抑える。だんだんと雨が弱くなり、やがて雲の向こうにさつきより濃い群青色の空が見え始めた。

「雨音がびしょびしょだ。とにかく家に帰ろう。このままじゃ風邪ひきかねないからな」

「えーと、精霊の『法術』を使えばこのくらい簡単に乾かせ……つと。そうですね。それじゃあ、あとで洗濯機と乾燥機使わせていただきますね」

ひなたが見ているのを敏感に感じ取ったのか、雨音は自分の力を使おうとはしなかった。理由は何となくだけど分かる気がする。超現実主義者であるところのひなたが見ている前で迂闊に力をつかったりしたら、きっと「ね、ね、今の手品の種を教えて！ 教えてくれなきゃ一晩中問い詰めるからね！」などと言いだして面倒な事になる。

ひなたはと言えば、雨音の言葉を気にする様子もなく、多分「また変な妄想してるんだね」くらいの気持ちで聞き流しているようだった。



## 第一章

### みーくんと兩音とひなた

#### 3 (後書き)

いかがでしたか？  
もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

## 第一章

### みーくんと兩音とひなた

#### 4 (前書き)

本編第一章の4をお送りします。  
それではどうぞ！

俺たちが家に到着する頃には、太陽はすっかり地平線の向こう側に隠れ、街灯の薄ボンヤリした明かりが住宅街の道路を照らしていた。

「それじゃ、今日は付き合ってくれてありがとね、みーくん」

「こちらこそ。……ホント、死なずにすんでよかった」

「なにかすつごく失礼なことを抜かしてやがりませんこと、みーくん？」

俺は雷に打たれたように直立不動の姿勢をとり、首の骨がボキボキと音を立てるほど激しく顔を横に振った。迂闊なことをいつたら今度は部屋の中から部活で使うなぎなたを取ってきて、俺に襲いかかってくるかもしれない。

「ふん。まあいいわ。ボクも今日は一日山歩きしてくっただから、さっさとお風呂入って寝ちゃうね」

ひなたが門扉に手をかける。ふわりと香辛料の香りが風に乗って俺たちの鼻に届いた。これは、カレーだな。そう思った瞬間、三人の腹が同時に大きな音を立てて鳴った。

「くっ、年頃の乙女がカレーの香りごときでなんたる不覚ッ」

「ひなたは乙女って柄じゃないだろ。一人称がボクだし」

俺の何気ない一言に、ひなたは沈黙で答えた。何故か体感温度が少しだけ下がったような気がする。そういえば、ひなたが自分のことを『ボク』と呼ぶようになったのって、一体いつからだっただろう？。

「ふ、ふんだ。みーくんには微妙な乙女心が分らないんだよ。このとーへんぼくー！」

「なんだと！？いくら何でも唐変木はないだろ！」

「とーへんぼくで悪かったら朴念仁だよ。ホント、みーくんは昔から……」

昔からなんだって？ という問いは俺の口からは出なかった。口をつぐんだひなたの表情が、あまりに寂しげだったからだ。こんな時、俺はどういう風に声をかけていいか分からない。物心ついた頃にはすぐそばに居たひなたなのに、その時の俺には彼女がなぜかすごく遠い存在に思えた。

雨音は俺たちのやりとりを困ったような表情で見ていたが、すつと目を閉じて大きく息を吸い込むと、何かを決意したような目で俺とひなたを見つめ、静かに切り出した。

「まず最初に、みーくんがひなたさんに悪いことを言いました。女の子に『乙女じゃない』なんて、絶対に禁句です」

うつ、た、確かにひなただって女の子だから、俺の物言いは失礼だったかもしれない。でもその後のひなたの言葉はあんまりだ。

「その次に、ひなたさんがみーくんに悪い事を言いました。自分の事を分かってくれないからって、唐変木とか朴念仁呼ばわりするのはよくないです」

そこまで言うと、雨音はふと天を仰いだ。俺たちもつられてもう夜色に染まりきっている空に目を向ける。

「わたし、思うんです。みーくんも、ひなたさんも、天に向かって唾を吐いたようなものじゃないかって。いま「べつ」て唾を吐いたら、それは自分に降りかかってきますよね？ さっき二人が言い合ったのは、自分自身に向かって唾を吐くようなものだと思うんです。だって、二人はずっと一緒に育った幼なじみで、言ってみれば自分の半身のような関係だと思うから……。だから、相手だけじゃなくて自分も傷つくような言い合いをしないで欲しいんです」

自分の半身……。意識したことはないけれど、雨音のいうことももっともだと思う。冗談とか例え話じゃなくて、ひなたは一個の人間であると同時に、俺の中にも確かに根を張った、分かちがたい関係だ。それはきつとひなたも同じように思っているだろう。

「わたしから、二人にお願いがあるんですけど、いいですか？」

「な、なに？ ボクにできること？」

「……内容による」

俺たち二人の返答を聞くと、雨音は花がほころぶような笑顔で言った。

「かんたんな事です。ちゃんと正面に向かい合って、互いに右手を差しだして、それを握る。ね？　かんたんでしょ？」

確かにかんたんな事だった。でも、もしも雨音がいなかったら、きっといつもと同じように憎まれ口を叩いて終わりだっただろう。それが俺とひなたの日常だったし、それが悪い事だなんて思ってもいなかった。

「え……つと。その……」

ひなたが俺の正面に立って上目遣いに俺を見上げてくる。先に言わせたらなんだか負けのような気がしたので、俺は先手をとることにした。

「ひなた、さつきは『乙女って柄じゃない』なんて言ってごめん！　許してくれるなら、その、握手してくれるかな」

「えっ……ええと。ボクこそつまないことで怒ってひどい事言っちゃって……。ごめんなさいっ！」

ひなたが深々と頭を下げる。こんな風に俺にあやまるひなたなんて、初めて見た気がする。雨音はそんな俺たちを笑顔でみていた。

「それじゃあ、仲直りの握手です。みーくんの右手と、ひなたさんの右手……」

雨音が俺たち二人の右手をとると、少しずつ距離を縮めていった。俺の指先がひなたのそれに触れる。ひなたが一瞬びくつと手を引きかけた。雨音は「わたしの役目はここまでです」とでも言いたげに俺たちの右手から手を放した。ここまでしておいて、手を引くなんてそれこそ唐変木だ。俺は思いきってひなたの右手を握った。久しぶりに握ったその手は、思ったより小さくて、柔らかくて、少しだけ汗ばんでいた。

「はい！　よくできました！　みーくんもひなたさんも、大事な人にひどい事言っちゃだめですよ？」

ひなたが俺の右手をきゅっと握りしめてくる。困ったような上目遣いで、でもその瞳には少しの喜びの色を滲ませて、俺を見つめてくる。やがて、どちらからともなく握っていた手は解かれる。右の手にさっきまでの神聖な儀式　そう、雨音がいたおかげで出来た儀式だ　の感触が残っている。

ひなたはくいつと顔をあげると、俺の前でくるとまわれ右をして、再び門扉に手をかけた。

「じゃあ、ボクはお母さん特製のカレーでお腹一杯にしてからゆっくり寝るね！　みーくん、また明日！　雨音ちゃん……今日は本当にありがとう！」

「食い過ぎるなよ？　俺は相撲取りみたいになっただひなたは見たくない」

「あ、ひつどーい！　ボクそんなに太らないもん！」

さっきの言い合いと同じようできて、どこかが優しい、そんな言葉の応酬。雨音もこんどは何も言わずに晴れやかな表情で俺たちを見ていた。

\*\*\*

「ただいまー。……っていつでも誰も返事してくれないんだけどね」  
「そっいえば家のかたはどうされてるんですか？　独り暮らしって仰ってましたが」

「んー、母さんは俺が小さい頃に病気で亡くなって、親父殿は仕事でスペインに住んでるよ」

俺は玄関で靴を脱ぐと、すぐ風呂場に向かい湯船に湯を張る。なにしろ、雨音がずぶ濡れなのだ。早いところ風呂で身体を温めてやらなきゃいけない。

「って！　なんで服も髪もすっかり乾いてるんだ！　着替えに思っただスウェットも用意したのに！」

脱衣場から戻ってみれば、雨でぐしゃぐしゃだった雨音の白いワ

ワンピースはすっかり元通りに乾いて、まるでお日さまの下で今まで干されていたかのようだ。おなじくびしょ濡れだった長い黒髪も、痛むこともなくさらさらと腰まで流れている。

「だって、ひなたさんが居るところで力を使ったら、多分面倒な事になるじゃないですか。だから、みーくんの家に着くまでわたし我慢したんです」

「まあ、そりゃあ賢明な策だとは思っけど。……風呂湧かしてるのってもしかして無駄？」

「身体を清潔に保つ、と言う意味なら入浴はわたしに必要なんです。どんなに泥まみれになっても、汗だくになっても、精霊の持つ力……『法術』を使えばあっという間に元通りですから。でもわたし、お風呂は大好きなんです。少しぬるいくらいのお湯にゆったり浸かるのがいいですよ」

そういう雨音は何とも言えない恍惚とした表情をしていた。余程風呂が好きとみえる。俺のやったことも無駄じゃなかったか。

「そういうえば、着替えとかはどうするの？ 『法術』でなんか作れるとか？」

「そうですね。このワンピースはわたしの衣服のパターンでしかありません。まあ、基本装備がこれ、だと思って下さい。で、『法術』を使うと――」

雨音が瞑目し、口の中で軽やかな言葉の旋律を紡ぐ。白いワンピースが眩しく輝きだし、その光は容赦なく俺の瞳に突き刺さる。俺は目を逸らし、片手で顔を覆って光を遮った。

「ほら、この通り。紫陽花柄のパジャマの出来上がりです！」  
さっきまで上品な白いワンピース姿だった雨音は、こんどは少しばかり子供っぽいデザインのパジャマに身を包んでいた。薄いピンク地に水色の紫陽花が鮮やかにプリントされている。

「はー……、やっぱりその『法術』便利だよなあ。なんでも思うままじゃないか」

「そうでもないですよ？ 『法術』を使うには必ず『マナ』を消

費します。マナというのは、そうですね、みーくんに分かりやすい  
いうと、自動車を動かすガソリンとか、モーターを動かすための電  
池、つまりエネルギー源だと思ってください。『法術』を使う者が  
集められるマナの量は、それぞれの能力によります。そして、マナ  
はわたしたち精霊が存在するためにも消費されています。もし自分  
の存在を維持するだけのマナを残さずに力を使えば、その精霊は…  
…消滅してしまいます」

「しよ、消滅!？」

「はい。綺麗さっぱり。霊魂が残ることもなければ、生まれ変わる  
こともありません。だから、『法術』を使うときはきちんと自分の  
存在出来る分を残して、周囲の空間に漂うマナを上手に集めてやる  
必要があるんです。どうです？ わたしもちよつとしたものでしょ  
？」

ちよつとしたものどころじゃない。もし俺が「一歩間違えたら完  
全に消滅する危険と引き替えだが『法術』を使えるようにしてやる」  
と唆されたとしても、絶対に首を縦には振らないだろう。そんな度  
胸、俺にはない。

俺が呆然と雨音を見つめていると、彼女はおかしそうにくすくす  
と笑いを漏らした。

「わたしたちにとって『法術』を扱うことは、そうですね、みーく  
んたちが自転車に乗るのと同じくらい気軽なことだと思って下さい」  
「自転車は転ぶこともあるじゃないか」

「補助輪付きの自転車ということにしておきます。とにかく、わた  
したちにとってはごく自然なことなんです。だからそんなに心配そ  
うな顔しないでいいんですよ」

俺は思わず自分の顔に手をやっていた。そんなに心配そうな顔を  
していたのか？ いや、確かに「下手をすると消滅します」なんて  
言われて、はいそうですかと落ち着いていられるほど俺は図太くな  
い。というか、自分の存在が消えるなんてことを、なんでそんなに  
簡単に口に出来るんだ。



「あ、お風呂入れますね。みーくんが先に入りますか？」

雨音の声に、俺はようやく我に返った。そうだ、彼女もいつてんじゃないか。精霊にとって『法术』を使う事はごく自然なことだ。て。ならば、その言葉を信じる以外に俺に何ができる？ そう考えると、頭に上っていた血がすうつと下がっていくのが感じられた。なんて事だ。俺はこんなに動揺してたのか。

「みーくん、どうします？ わたしは後でもいいんですが」

「いや、先にゆっくり浸かってよ。俺はその間に夕飯の支度しておくから」

「え？ それでしたらわたしがお風呂いただいてから用意させていただきますけど？」

「いいからいいから。今日は朝食も昼の弁当も作ってもらったんだ。夕飯くらいは俺が作るよ」

俺は雨音の背中を押して脱衣場へと向かう。ついでに洗濯物を全自動の洗濯乾燥機に放り込んでスイッチオン。ドラムの中の洗濯物が踊るのを物珍しそうに見ている雨音を促して、浴室に入る。カラシやシャワーの使い方、それに入浴剤や石けんやシャンプーを一通り説明して、

「それじゃあ、ごゆっくり」

俺は風呂場を後にしてキッチンへと向かうのだった。

\*\*\*

「さて、何を作るか……」

俺だけなら適当に野菜炒めとか、ラーメンとかで済ませてしまう夕飯だったが、今日からは雨音がいる。しかも、彼女が作ってくれた朝食と弁当はそれはもう思い出すだけでだれが出そうなほど美味かったのだ。ここは一つお返しをしなければ男が廃るというものだ。

「とりあえず冷蔵庫の確認、っと。牛挽き肉と……豆腐があるか。」

これは『アレ』を作れとの神様のお告げに違いない」

アレ、そう豆腐と挽肉とくればアレ以外のメニューは有り得ない。そして、この俺はアレを作る事に関してはちよつとした自信を持っている。

「そうと決まれば……ネギ、あるな。豆板醤、ある。鷹の爪、OK。花椒問題なし。ニンニクの芽は……つとあつたあつた。ちよつど芽が出てるニンニクがあるからこれ使っちゃえ。この前作った花椒油（山椒をサラダ油で煮た調味油）もまだあるな。ふっふっふ……これで本場四川人が泣いて喜ぶアレを作つてあげよう」

とりあえず、俺は材料や調味料の在庫を確認すると、先にキッチンの流しで米を研いだ。魚沼産のコシヒカリ。一人暮らしだと一〇キロの米を消費するのは結構大変な作業だ。丁寧に水加減を確認して、炊飯器のスイッチを入れる。最近の炊飯器の早炊きモードは馬鹿に出来ない。ちよつと昔の炊飯器で普通に炊いたご飯より余程美味しかったりする。技術の進歩はすごいものだ后感心しつつ、『アレ』を作る準備に入る。

まずは木綿豆腐をサイコロ切りにして、ごく弱火で塩ゆでする。その間に豆鼓とちち、ニンニク、唐辛子粉、醤油、老酒、旨み調味料、甜麵醬めんじやん、胡椒、砂糖で合わせ調味料を作っておく。別々に調味料を入れる作り方もあるけど、俺はこっちの方がスピードが上がるので、このやり方を好んで使う。豆腐をしばらく茹でたら、いよいよ中華鍋の登場だ！ 鍋を強火にかけ、油ならしをしておく。十分鍋が熱せられたら、こんどは鍋にごま油をひき、強火で加熱する。そこに牛挽肉を投入。パラパラになるまでしっかり炒める。挽肉がぱらぱらになったら豆板醤をいれて、さらに香りが立つように炒める。中華は火力！ うちのキッチンがIHヒーターじゃなくて本当によかつた！

さて、豆板醤の香りが立ってきたら、先に作つてあつた合わせ調味料を投入。さらに炒める！ 焦げ付く寸前まで香りを立てるのがコツだ。このタイミングの見極めで『アレ』の出来の善し悪しがま

るで変わってしまう。そして鶏ガラスープを投入。ガラスープの素は業務用スーパ―でつかいのが売ってるから買っておくといい。色んな料理に使えるぞ。

さてスープを投入したら、ニンニクの芽を一センチくらいの斜め切りにして鍋に。さらにネギをみじん切りにして投入。そして、いよいよ主役の豆腐の登場だ。塩ゆでしたのは煮崩れないようにするのと、仕上げの煮込み時間の短縮のためだ。ついでに齒ごたえもよくなる。仕上げに手間取っていると焦げ付いてとても食べられたものじゃない『アレ』が出来てしまう。

中華は火力だ！ と言ったけど、豆腐を入れたあとは一旦弱火にして、しばらく煮込む。もう見た目は大分『アレ』らしくなっている。だが、まだ足りないものがある。それはとろみだ。『アレ』にはとろみが欠かせないのだ。水溶き片栗粉を鍋に回し入れ、再び火を強火に。ラー油と花椒油を回しかけて全体を一混ぜ。よし、完ッ壁ッ！

俺はコンロの火を消すと、脱衣場へと向かった。

脱衣場に人の気配がないのを確かめてから、扉を開く。ちょうどそのとき、タオルで身体の前半分だけを隠した雨音が、浴室の扉を開けて出てきた。

二人の間に気まずい沈黙が落ちる。

雨音の顔が見る間に赤くなっていく。

見ちゃいけない！ おい！ 見るな俺！ そう言い聞かせても視線が雨音の白い肢体から引きはがせないッ！ 湯に浸かりほのかに桜色に染まった白い肌がなまめかしい。雨音の硬直した手からタオルがこぼれ落ちる。一系まとわぬ雨音の姿が目の前に！ 扁平だ扁平だと馬鹿にしていた胸はやはり扁平だったけど、それでも少し柔らかな起伏を描いていて……。これはダメだ！ 今すぐ扉を閉めるんだ俺っ！

「ごうごう、ごめん!!」

俺は脱衣場の開き戸を全力で閉めた。その拍子に、右足の指を戸に思いきり挟んでしまう。廊下にもんどり打つてのたうち回る俺。だが俺は悶絶しながらも、俺は扉の向こうの雨音に本来の用件を伝えた。

「ゆ、夕食の準備が出来てるから……着替えたらダイニングへきて」「あ……分かりました……。すぐ行きますから待っていてください」

脱衣場の扉の隙間から、眩い光が漏れ出ている。どうやら雨音が『着替え』をしたらしい。扉の外で待っていると、さっきの紫陽花柄のパジャマを着込んだ雨音が頬を赤らめもじもじしながら出てきた。うつつ、やっぱり覗きに來たと思われたかも……。

「……覗きにきたわけじゃないからね」

「わかってます。あれは事故です。そういうことにしておきます……。でも、どの辺まで見えました……?」

「いやもうタオルで隠れてたから全然!」

本当は全部見えていたんだけど、それをそのまま伝えるのはまずい気がして、俺は嘘をつくことにした。この場合、嘘についておいた方がお互いのためだよな?

「そうですか……よかった」

「ところでうちの風呂はどうだった?」

俺は無理やり話題を逸らしにかかった。雨音も話題を変えたかったのか、すぐに応じてくる。

「とつても気に入りました! あのお湯が白く濁る粉、いい香りだし肌はつやつやになるし、身体は芯から温まるし、最高です!」

白く濁る粉というのは、百均ショップで一箱百円で何箱かまとめ買いしておいた入浴剤だ。あんな安物でそこまで満足してもらえなう何箱か買っておこうかな。

「ところで……さっきから気になっているんですけど、何だか目が痛くありませんか?」

「ん? ああ、それは夕飯のおかずの匂いじゃないかな」

「匂いっていうか、目が痛いんですけど……」

「まあまあ、ちょっとキッチンに来てもらんよ」

俺はパジャマ姿の雨音の両肩を押しながら『アレ』が鎮座しているキッチンへと向かった。雨音も絶対に感動するに違いない。何しる本場の人間が太鼓判を押してくれた究極の『アレ』なのだから。

「さあ、この中華鍋の中身を見てくれ。こいつをどう思う？」

「……とても……赤いデス……」

おや？ 何だか期待した反応と違うぞ？ 雨音は中華鍋の中身の『アレ』 〓 四川式本格麻婆豆腐を見つめて脂汗をたらしている。まるで地獄の釜でも見ているかのような形相だ。おかしいな、きつと「おいしそうですっ！」 って言ってくれるものだばかり思っていたんだが。

「ていうか、これ、唐辛子の刺激じゃないですかっ！ 目が痛いのに！ 何ですかこれ！ まるで赤い悪魔の煮物ですっ！ どれだけ辛いんですかこれ！」

「どれだけって言うてもなあ。親父の会社の同僚の中国人が四川省出身でさ、一度これを食わせたら泣いて喜んでくれたよ」

「辛いものばっか食べてて味覚が破壊されてる四川人と、繊細な味覚をもつ日本の由緒正しい雨の精霊と一緒にしないでください！」

ちよつとまった雨音さん、その発言は四川人を激怒させるぞ？

だれだっけ、さっき家の外で口汚く罵りあう俺とひなたをたしなめて仲直りさせたのは。

「まあまあ。とにかく食べてみてよ。味は保証するからさ」

俺は深皿にたっぷりとその『赤い悪魔』をよそう。だがしかし、これでは麻婆豆腐は完成を見ないのだ。そう、最期の決め手の登場である！ 俺は花椒の粉をこれでもかとかばかりに真っ赤に染まった皿に振りかける。まさに四川人もびっくりだ！

「さあ！ これが四川人も唸った究極の麻婆豆腐だ！ 遠慮せず食べてくれ！」

俺は皿をダイニングテーブルに運ぶと、一緒に作っておいた卵ス

「プとご飯、それにちりれんげを添えて、極上の笑顔で雨音が食卓に着くのを待った。」

「あうううっ……、目がしばしばしますう」

雨音は俺の期待の視線に耐えられなくなったのだろう、のそのそとちりれんげを右手にとると、彼女曰く『赤い悪魔』の入った皿に面と向かった。恐る恐るひとさじを掬い上げ、震える手で口に運ぶ。桜の花びらのような唇が開かれ、ちりれんげで掬われた真っ赤な料理を、彼女はその口に含んだ。

「っ！……あれっ！？……お、美味しいっ！」

やったぜ！ 四川料理をただ単に辛いだけだと思っちゃいけない。味のバランスが大事なのだ。麻（山椒の痺れるような辛さ）と辣（唐辛子の辛味）のバランスが。このバランスがあつてこそその麻婆豆腐なのだ！

「わたし、もつと辛くて辛くて刺々しい料理だとばかり思ってた！ でも、この辛さはくせになりそうですっ！」

「ご飯にもよく合うでしょ？」

「とつても！」

さっきまで地獄の縁にいるような表情だった雨音は、辛い辛いを連発しながらもご飯二杯と四川式麻婆豆腐を完食してくれた。額に汗を浮かべながら、笑顔で食べきった雨音の瞳には、何かを成し遂げた者だけが持つ眩い光が宿っていた。

\*\*\*

「ところで、最後の願いが決まるまではうちに寝泊まりしてもらうとして、部屋をどうするかだなあ」

「わたし、居間のソファでいいですよ？」

「いや、そういうわけにもいかないでしょ。一応客間は有るにはあるんだけど……」

そう、部屋は余ってるのだ。余っているのだが、使えるかどうか

はまた別問題というわけで。まあいい、口で説明するより現状を見てもらった方が手っ取り早いだろう。俺は食器を洗う手を止めるとエプロンで手を拭き、雨音に「ついてきて」と目で合図して二階への階段を上った。

二階には俺の部屋ともう二部屋があり、一部屋は親父の書斎というか、書庫のようになっている。そして問題の部屋は、廊下を挟んで俺の部屋の向かいにあった。

「いいかい？ 開けるよ？」

「は、はいっ！」

引き戸を開いて電気のスイッチを入れる。そこは六畳の和室だった。誰も使わない部屋には埃が降り積もり、天井の隅には大きな蜘蛛の巣が出来ている。ここに雨音を押し込むのはいくら何でもあんまりだろう。そう思っただけで雨音の方を見ると、彼女はにっこりと笑みを浮かべていた。

「つまり、この部屋を使えるようにすれば、わたしの部屋として使っていていいんですね？」

忘れていた。彼女は『法術』の使い手、雨の精霊の眷属だったのだ。彼女の余裕からみて、この部屋を使えるようにするのは容易いことらしい。

「麻婆ばわーでマナも全開！ 一気に部屋の改造しちゃいますよっ！」

雨音が部屋の中央まで歩いて行く。いや、歩いているはずなのに畳の上の埃に足跡がついていない。雨音は『空中を』歩いているのだ。部屋の中央で彼女は静かに瞑目する。やがて、これまでで一番長い言葉の旋律が、雨音の花びらのような唇から漏れ聞こえてきた。雨音の身体が眩い光に包まれ、その光は部屋全体に広がっていく。

「ッ！！」

最期の一声が雨音の口から紡ぎ出されると、部屋を満たしていた眩い光は徐々にその勢いを失い、元からあった蛍光灯の光だけが室内を照らしていた。

「どうでしょう。わたしは結構上出来かと思うんですけど……」

畳の上には小さめの絨毯が敷かれ、その上にガラスのテーブルが鎮座している。部屋の隅には大きな鏡のついたドレッサーがあり、反対の隅にはシングルベッドが置いてあった。部屋中にもりに積もっていた埃は跡形もなく、まるで何時間もかけて掃除をして部屋の模様がえでもしたかのような。雨音はベッドの縁に腰掛けて、ちよっと自慢げに微笑んでいた。

こうして、当面の懸案事項である「雨音の部屋をどうするか」という問題は、実にあっけなく片付いてしまったのだった。やっぱりちよっと羨ましいぞ、精霊の『法術』。

まあ、ホントにくれるって言われても、俺は断るけどさ。



## 第一章

### みーくんと兩音とひなた

#### 4 (後書き)

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

## 第二章

### 精霊は人間の常識を身につけられるか

#### 1（前書き）

本編第二章に突入です。今度は雨音がみーを追いかけて……。それではどうぞ！

甲高い電子音が俺を眠りの世界から引きずり出そうと鳴り響いている。もう朝か？ 俺はもつと寝ていたいんだ。昨日は一日森林公園で歩き回って、疲れ切っている。だからあと五分でいいから寝かせて……。

「みーくん？ さっきから目覚まし時計が鳴ってますけどお、起きないんですかあ？」

すぐ隣で鈴を鳴らすような少女の声が聞こえた。眠いんだ。でも目覚まし時計は部屋の反対側の机の上に置いてある。寝坊防止のための工夫が裏目に出たな。俺は雨音の細い身体を抱きしめると、二度寝を決め込んだ。

「あんっ（はーと）」

「って！ どうして雨音が俺の布団で寝てるんだ!!」

寝ぼけていた頭が一発で覚醒していた。首の後に巻き付けられた雨音の腕を振りほどいて、俺はベッドから跳ね起き、部屋の反対側まで行くと、目覚まし時計のスイッチを押した。

「いったい今何時だ？ 昨日何時に目覚ましかけたっけ。デジタル表示は五時五〇分。普段より三〇分早い。なんでこんな時間に……？ あ、そうか。今日から学食の改装で弁当がいるんだった。

「ふあああ~~~~っ……。たかが三〇分、されど三〇分だなあ」

だが、弁当を作らないと、昼に大混雑した購買で、数の限られたパンを巡って他の飢えた生徒たちと、血で血を洗う激しいバトルを演じなければならない。当分は弁当を用意しなきゃいけないんだ。この時間に目をさますように身体のリズムを整えておかないといけないな。

「とりあえず雨音、また俺を起こしに来てトラップにはまったのは分かったから、まずは起きて出ていってくれないか。そんなに俺の着替えが覗きたいんなら話は別だけど」

「ええっ！ い、いいんですかつ！」

「んなわけあるか！」

俺は机の本棚から極厚の国語辞典を採り上げると、雨音の脳天めがけてそれを振り下ろした。

雨音の首根っこを引つ掴んで廊下に放り出し、制服に着替えて、顔を洗いに洗面所に向かう。

あれ？ キッチンからいい香りがする。

「あ、みーくん、朝ご飯、出来てますよー」

この匂いは……ベーコンだ。ということは、ベーコンエッグかな？

「雨音。わざわざ早起きしてまで朝食作ってくれなくてもいいのに」

「いえっ、せつかくお部屋まで貸して頂いて置いていただくんです。このくらいのはさせていただかないと」

ふとダイニングテーブルの上を見ると、布で包まれた四角い物体が目に入った。これってもしかして……。

「あ、お弁当も用意しておきましたよっ！ 朝ご飯を作るついでに手早くぱつと！」

「あ、ありがと……」

そういえば、昨日の弁当もそうだったけど、誰かに弁当を作ってもらうなんて何年ぶりだろう。幼稚園のころは親父が作ってくれてたけど、小学校中学校は給食だったしな。運動会の弁当なんかも親父が作ってくれてたけど、小学校高学年くらいからは自分で用意することが多くなった気がする。

「はい、今日はベーコンエッグですよー！ トーストにしようかとも思っただんですが、主食はご飯です。お弁当作るのにも必要でしたし」

雨音がダイニングテーブルに手早く料理を並べていく。カリカリベーコンに半熟の目玉焼きが載ったベーコンエッグ。生野菜のサラダ、それにご飯とネギと豆腐の味噌汁。トーストでも確かにいいかとも思っただけど、俺はどちらかというと朝はご飯派だ。

「さ、召し上がれ！」

雨音の料理の腕はすでに確認済みだ。俺は湯気を上げる味噌汁を一口する。口の中に煮干しで取ったダシと、香り豊かな味噌の風味が広がっていく。うん、やっぱり雨音の作る味噌汁は美味い。

「い、いかがでしょうか？」

「うん、美味しいよ。昨日のも、今日のも」

「よかったあ」

雨音が心底安心した笑顔を浮かべる。うん、朝から超絶美少女の笑顔と、その子の手作り朝食をゲット。いやあ、俺は今もの凄い幸運に恵まれているんじゃないのか？ まあ、超絶美少女の雨音ではあるが、胸はまるでドーバー海峡の絶壁のように平べったいのだが、そんな俺の失礼極まりない考えには全く気づかない様子で、雨音はにこにこしながら朝食を平らげる俺を見ている。

「そういえば、今日は平日ですから、みーくんは学校ですよね？」

「うん。部活の練習もあるから、帰るのは七時くらいになるかな。」

ああ、そうそう。これを渡しておかなきゃ」

俺は小さな鈴のついた鍵をポケットから取り出して、雨音の手のひらに載せた。

「これ、うちの合い鍵。家にずっと居るのも退屈だろうから、暇だったら鍵かけて出かけてもいいからね」

「あ、ありがとうございますっ！ あのこと……それから……」

「『最期の願い事』でしょ？ 分かっているって。ちゃんと考えるから。大事なことから時間かけて考えるよ」

それを聞いた雨音は少し複雑な表情をしてみせた。ん？ 俺は何かまずいことでも言ったか？

「わかりましたっ！ 焦らないでじっくり考えて下さい。でも……ちよつとだけ急いだけいただけると嬉しいかも」

「？ うん。分かった……」

俺は何か心に引っかかるものを感じながらも、それをカリカリのペーコンと一緒に飲み込むことにした。

「それじゃあ、俺は学校行ってくるけど、その間留守番お願いね」  
「はいっ！ みーくんは安心して学業に励んでください！」

曇りのない笑顔で手を振りながら、雨音は登校する俺を玄関先まで見送りにでてくれた。でも、あの笑顔、なんかいつもの たった二日しか一緒にいないけど いつもの雨音の笑顔とは違う ような気がしてならない。なんというか、裏に何かを隠している ような、そんな感じだ。

いつもの通りにひなたの家のインターホンのボタンを押す。その 途端、家の中からドタドタという足音と、「なんでもっと早く起こ してくれないの！」叫ぶひなたの声が聞こえてきた。

待つこと数分、身支度を調えたひなた玄関の扉を開けて出てきた。 いや、整ってるかと言われたら微妙な感じなんだけど。ショートカ ットの髪は所々変な方向にはねてるし、口にはお約束のようにジャ ムを塗ったトーストくわえてるし。両手には長刀袋と防具一式、そ れに通学用かばんという大荷物だ。

「おまはへ！ はあ、いひまひよう！」

「とりあえず口にパンくわえたまま喋らなくていいから」

ひなたはもごもごと器用に口を動かすと、手を使うことなくトーストを食べきってしまった。

「これで問題なし！ さあ、今日も元気に学校へ行くゾ」

語尾になにやら謎の『』がついている上に、わざとらしくウインクまでしてみせる。ああ、間違いなくいつも通りのひなただ。

「朝練あるんだから、いい加減早起きにも慣れるよな」

「わかってるよ。ボクだって好きで寝坊してるわけじゃないもん」

「それじゃ、何か早起きする工夫はしてるのか？」

俺のその問いに、ひなたは腰に手を当て胸を反らせて誇らしげに 答えた。

「お母さんに起こしてってたのであるもん」

「それ、工夫でもなんでもないから」

俺の答えが気に入らなかったのだろう。ひなたはぶんぶんという擬音がぴったりな感じに頬を膨らませると、ぷいっとそっぽを向いた。

「みーくんがなんて言っただって、これはこれでボクの工夫なんだよ」  
「分かった分かった。とりあえず朝練に遅刻するぞ。師範、かほるちゃん……じゃなかった、樟葉先生だよなあの人怒るとすげえ怖いのはお前の方が良く知ってるだろ？」  
「というわけで、学校へGOだ！」

ボクは軽くひなたの制服の肩をおしてやる。ひなたはすこしバランスを崩したたらをふむが、すぐバランスを取り戻してボクの一步前を学校へと向かって歩き始めた。

「別に毎朝起こしに来てなんて、ボク頼んでないからねっ！」

「はいはい。これは俺が好きでやってることだから気にしないでいいよ」

\*\*\*

部活の朝練を終えて、俺は練習用のカンフーパンツとTシャツから制服に着替え直していた。全校生徒が何らかの部活に入らなければならぬうちの学校では、時間ギリギリになって登校してくる生徒などいるはずもない。

俺は体育館の男子更衣室を出て、新館校舎にある二年C組の教室へと向かった。そこが俺のクラスであり、ひなたも同じクラスだった。なぎなた部は女子ばかりだからか、朝練を少し早めに切り上げる。まあ、女の子の着替えは男のそれより時間がかかるものだろうから、それは仕方のないことだ。だというのに、俺が教室に着いてみればまだひなたは来ていなかった。

「いやあ、すっかり遅くなっちゃった。みーくんお待たせっ！」

「別に待ってたわけじゃない……。なんだかいい匂いがするな」

ひなたは俺の隣の席に座ると、「気づいたか」というようにニヤリと口のはしに笑みを浮かべた。

「汗かいてそのままなんて、年頃の乙女としてはアレだからね。コロンをつけてみたんだよ」

ふむ。まあ、そんなにキツイ香りでもないし、この程度なら制汗剤の匂いですって言ってもごまかせるだろうからな。

「先生にバレないようにな」

「大丈夫だよ。かほるちゃんも公認なんだ」

いいのかそれ。仮にも自分が顧問をしてる部の部員が校則違反してるのに、それを公認って。

「それにしても、きょうはかほるちゃん遅いね。何かあったのかな」

予鈴はすでに鳴っている。予鈴が鳴ったらすぐに現れるのが、なぎなた部の顧問にして我がクラスの担任、かほるちゃんこと樟葉<sup>くずは</sup>かほる先生だった。他のクラスメイトたちも口々に「遅い」「何かあったんじゃない」「病欠？」などと言いつけている。やがて静かな潮騒のようだったさざめきは、教室の壁を通り抜けて他のクラスにまで届くほどの大騒ぎになっていた。

「うるさい！ 一体何の騒ぎだ！」

唐突に教室のうしろの扉が乱暴に開かれ、隣のD組の担任である寺井先生が怒鳴り込んできた。一瞬にして教室が静まりかえる。

「あ、あの、樟葉先生がまだいらっしやらないんです。みんなそれで心配して……」

クラス委員の古川<sup>ふるかわ</sup>香里<sup>かあり</sup>が、寺井先生に事情を説明する。寺井先生は「そんなことか」というような表情を浮かべた。

「樟葉先生は今校長室だ。なにやら急な転入生があつたらしくてな。とにかく！ 大人しく先生が来るまで待つてろ。次に騒ぎ声が聞こえたら……分かつてるだろうな？」

寺井先生は体育教官も真っ青の超マツチヨである。背広の上からでもその筋肉の着き方が尋常じゃないのは一目瞭然だ。その超マツチヨ教師に睨み付けられた二年C組の生徒たちは、一様に真っ青に



なり、ガクガクと首を縦に振る。

「よろしい。おっと、噂をすれば影だな。樟葉先生、あとはよろしく」

「はい、みんな～お待たせ～。席について下さいね～」

二〇代半ばとは到底思えない童顔と、幼い服装センス。ショートカットの髪も童顔にぴったり合っていて、高校生、いや、中学生だと言われても全く違和感がない。そんな女の子が、教室の前の扉を開いて、とことと教壇に上った。もう何度も繰り返された朝の儀式だ。いいか、あれはどんなに幼く見えても担任教師なんだ。……よし、今日も何とか納得できた。

「はいよろしい！ きょうはですね～、素敵な転校生を紹介しちゃいますよ～？」

クラスメイトたちからどよめきが上がる。ふむ、転校生か。こんな中途半端な時期に転校するなんて、大変だよな。俺はそんな感じの軽い同情を、その転校生に感じていた。まあ、急な親の転勤とか、そんなところだろうな。

「では～、早速、紹介しましょう～。男の子には朗報です！ とつてもチャーミングな女の子ですよ～？」

クラスの男どもが雄叫びを上げる。俺はといえば読みかけの文庫本を机の下に隠しながら読み進めていた。転校生といったって、クラスのなかにはいつてしまえばクラスメイトの一人に過ぎない。だって、そのうちイヤでも話す機会が出来るだろう。

「では、風香さんふうか～、入って下さい～」

ざわめいていた教室の空気がピンと張ったものになる。俺も文庫本から視線を上げて、入り口を見る。シンと静まりかえった教室に、その転校生が姿を見せた。白い上品なワンピースに、大きなつばのリボン付きの帽子。長い黒髪は腰までさらさらと流れるように伸び、華奢な手脚は絶妙の曲線を描いて……ええい！ もういいだろ！ なんて『彼女』がこんな所にいるんだ！

「はい！ 男子諸君～？ いくら想像以上に可愛い女の子だから

って、そんなにがつついてたら逆に引かれちゃいますよ〜？　では風香さん、自己紹介をおねがいますね〜？」

その『彼女』、つまり雨音が、黒板にちんまりした字で『風香雨音』とチヨークで書き、くるりと振り返った。

「はじめまして。風香雨音です。雨の音、とかいてあまね、と読みます。父の仕事の関係で急に転校が決まりました。前の学校が私服登校だったので、制服が出来るまでしばらくは私服で失礼します。みなさん、よろしく願いますね」

すまし顔で柔らかな笑みを浮かべる雨音。そうか、朝の笑みの裏に隠されていた『何か』はこれだったのか。きつと精霊の『法術』でもって学校に潜り込むことに成功したんだろ。でも、なんで学校に来るんだ？

「はい、風香さんの自己紹介でした〜、みなさん拍手〜」

主に男子生徒から割れんばかりの拍手が惜しみなくおくられた。

雨音は微笑みながら手を振ってそれに応えている。

「はい、それじゃあ、風香さんの席はあ〜」

俺の左隣は空席である。いや、今となつては空席『だった』と言うべきであろう。右隣にはひなた、左隣に雨音。学校にまでこのフオーメーションを持ち込むことはないだろ？　いったい何の嫌がらせだ？

「よろしくおねがいますね、みーくん」

小首をかしげながら俺に微笑みかける雨音。あとで絶対に絞り上げてその魂胆を白状させてやる。極厚月刊マンガ雑誌が唸りを上げるぞ。

「雨音ちゃん、やっぱりただの転校生なんじゃないかあ。デンパな話ばっかしてるけどいい子だし、こりやみーくんの家に住まわせておくのは勿体ないね！　いつそボクのウチの子にならない？　悪いようにはしないよ？」

ひなたの迂闊な発言は、静かな水面に一滴の滴が落ちたように、教室に波紋を広げていった。

『みーの家に住んでる……だと……？』

ゴゴゴゴゴ……という効果音と共に、クラス中の男子生徒たちからの殺意に満ちた視線が俺に突き刺さる！

「それは、魅力的なお誘いですけど、わたしは出来るだけみーくんのそばにいたくないんです。願い事がいつ決まるかわかりませんから」

「ふむう、よつぼどみーくんの願いを叶えることが大事なんだねえ」

「ええ、それがわたしが地上に居続ける理由ですから」

すっかりひなたを手なずけてしまった雨音は、俺がクラスの男子全員から明確な殺意のこもった視線を浴びているのをよそに、ガタガタと机を動かして俺の机とくっつけた。クラスの男子生徒たちからの圧力がさらに高まる！ 視線で人が殺せるとしたら、俺はこの数分で何回死んでいるだろうか。

「あ、雨音さん？ 何をしてるんデス？」

「だって、急な転入でしたから、教科書がないんですつ。樟葉先生にいったら、みーくんに見せてもらうようにって言われました」

担任にもみーくん扱いされている俺だった。

「……何を企んでるのか、あとでじっくり聞かせてもらうからな」

「え？ みーくん何か言いましたか？」

「……なんでもないよ」

こうして、雨の精霊で俺の願いを叶えるために地上に留まってい  
るはずの雨音は、俺のクラスに転入してきたのだった。

## 第二章

### 精霊は人間の常識を身につけられるか

#### 1（後書き）

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せください。

## 第二章

精霊は人間の常識を身につけられるか

2（前書き）

本編第二章の2をお送りします。  
それではどうぞ！

昼休み。俺は雨音お手製の弁当を持って、ひとり中庭へと向かっていた。なぜかって？ この弁当を教室で開いてみる。雨音もおそらくは同じ中身の弁当を持ってきているに違いない。それを他のクラスメイトに見られたら？ 特に男。想像するだけでも背中に嫌な汗が伝う。さらに右隣の席にはひなたが陣取っている。この弁当を見られたら……。想像したくない。

目指す中庭は、新館と旧館に挟まれたちよつとした広場だ。花壇の縁を椅子代わりにして昼食をとる生徒も少なくない。

昨日に続いて梅雨らしからぬ晴天に恵まれた今日も、中庭には男女問わず弁当を手にした生徒が集まっていた。学食の改装工事のせいか、普段よりかなり多いようにも見える。

「さて、さつさと弁当食べて教室に戻るか」

俺は空いていた花壇の縁に腰掛けると弁当の包みを解こうとした。そのとき、ぽつり、と冷たい物が俺の頬に当たった。空を見上げると、さつきまであれほど晴れ上がっていたのが嘘のように、雲が空一面を覆っている。

「これは……まさかつ！」

雨音が泣いている姿が俺の脳裏に浮かび上がる。まさか、俺が黙っていなくなっただからか？ いや、もしかしたらクラスの男子たちから質問攻めに遭って、泣きそうになつてるとか？ とにかく雨音に何かがあつたのは間違いない。

俺は解きかけた弁当をそのまま持つと、教室へと向かって小走りに歩き出した。そうしている間にも、雨の粒は数を増していく。急な雨に驚いた生徒たちが、屋根のある渡り廊下へ向かって走っている。俺は生徒たちをかき分けながら教室へと急ぐ。

「……く〜ん、み〜く〜ん、どこですかあ？ ぐすつ」

階段を上り、教室のある三階にたどり着くと、廊下に雨音がベそ

をかきながら俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。やっぱりか。

「雨音！ 俺はここだ！」

「！ みーくん……。ううっ……」

雨音の大きな瞳が涙でどんどん潤んでくる。それと同時に、窓を叩く雨粒の数が増えていく。

「どこにいつちやっただんですか？。せつかく一緒にお弁当食べようと待ってたのに。その間、クラスの男子の皆さんに囲まれて大変だったんですよっ」

どうやら心配したことは両方ともビンゴだったようだ。俺はとりあえず黙って雨音にハンカチを渡した。

「ぐすっ、ありがとうございませふ。ずびーっ」

涙を拭けというつもりで貸したハンカチは、見事に雨音の鼻水まみれになってしまった。

「あ、みーくん！ どこ行ってたのさ！ 雨音ちゃんが大変だったんだゾ！」

廊下の反対側からひなたがずんずん歩いてくる。どうやら俺を捜して歩き回ったようだ。額には汗が滲み、乱れた髪が頬に貼り付いている。

「いや、弁当食べようと思って中庭に……」

「だったらなんでボクと雨音ちゃんを放っていくのさ！ あのあと雨音ちゃん、男子に囲まれて質問攻めにあって大変だったんだから！」

ひなたはまったく容赦がない。俺に言い訳をする隙すらみせてはくれないのだ。なんだよ、教室に残って弁当を開いたら、それはそれで大騒ぎになりかねないから俺は席を外したんだぞ？ まあ結局俺のやったことは無駄だったわけだけど。

「……ごめん」

「謝るならボクじゃなくて雨音ちゃんにでしょ！ ほら！」

廊下には騒ぎを聞きつけて何事かと集まってきた他のクラスの生徒たちも大勢いる。そんな中で謝るのは、顔から火が出て校舎に延

焼しかねないほど恥ずかしい。でも、ここで俺が謝らなければ、ひなたは絶対に俺を許さないだろう。

「……悪かった」

「声が小さい！」

「黙っていなくなつて悪かった！ ごめんなさい！」

俺は半ばやけくそで、叫ぶようにして雨音に謝った。同時に思いきり頭を下げる。周りの生徒たちの視線が俺たちに集まっているのが分かる。こんな羞恥プレイを強要されるなら、最初から大人しく教室で冷やかされることを選ぶべきだった。だが、まさに後悔先に立たず。俺は雨音の許しの言葉を待つて頭を下げ続けた。

「……ゆるしてあげません」

「えっ!？」

てつきりすぐに許してもらえればかり思っていた俺は、素っ頓狂な声を出してしまった。顔をあげると、目を真っ赤に泣きはらした雨音が、じつと上目遣いに俺の顔を見つめてくる。

「絶対に許してあげません。……でも、これからはちゃんと一緒にご飯を食べてくれるって約束してくれるなら、今回だけは特別に赦してあげます」

雨音はその花びらのような唇を一字にきゅつと結び、涙をこらえつつ俺の瞳を覗き込んでくる。まるで、そこから俺の心の底を覗こうとしているかのように。雨音の有無をいわさない瞳に気圧されるようにして、俺は首を縦に振っていた。こんな風に迫られて、断るなんて出来っこない。

「……よかった。本当は断られたらどうしようかって思ってたんです。みーくん、やっぱり優しいですね」

目の縁に涙を浮かべながら、それでも雨音は花が開くような微笑みを俺に向けてくれた。俺はちつとも優しくなれない。からかわれるのが嫌で、雨音を残して教室から逃げ出したのに。それなのに、雨音は俺を優しいという。俺は自分が情けなかった。

「とにかくっ、教室に戻ってお昼食べましょう！ みーくん、もう



食べちゃいました？」

「いや、まだ蓋もあけてない」

「ちようどよかった。ボクたちもまだ全然食べてないんだよ。さ、教室に戻る！」

周りに集まった野次馬を視線で追い散らしながら、ひなたが先頭に立って教室へと向かう。俺と雨音はモーセの前で海が割れるかのように人退いていつて出来た道を、ひなたに続いて歩いていった。ふと、廊下の窓から空を見上げると、さっきまで大粒の雨を降らせていた雲はすっかりどこかへ消え去り、代わりに眩しい太陽が顔を見せていた。

\*\*\*

結局雨音とひなたと俺とで机をくつつけて昼食をとったあとは、いつも通りの退屈な午後の授業だった。俺の左隣では、雨音が真剣な表情で数学の教師の退屈きわまりない講釈を有り難そうに聞き入っている。こうしてみていると美少女優等生に見えなくもない。ただし何度も言うようだが、胸は表現するのが憚られるほどに平たいのだが。

俺がじつと雨音の横顔を見ていると、その視線に気づいたのか、雨音も俺の方を見上げてきた。小首をかしげて頭の上に『？』を浮かべている。俺は慌てて雨音の顔から視線を外し、黒板に書かれている複雑怪奇な数式をノートに写すふりをはじめた。だって恥ずかしいじゃないか。雨音の顔に見とれてた、なんてことがばれたら。「ふむふむ。みーくんはそんなに雨音ちゃんのお顔が見ていたいのかな？」

なんたる不覚。右隣の席にはひなたが座っているのを忘れていた。しかし、それを知ってるってことは、授業中だつてのに俺の方ばかり見てたつてことじゃないのか？俺がノートを取る手を休めて、今度はひなたの顔をじつと見ていると、ひなたが横目でチラリチラ

リと俺の方を伺ってきた。心なしか頬が赤いように思える。それでもひなたを見つめ続けていると、今度は真っ赤になって下を向いてしまった。小声でひなたに話しかけようとしたその瞬間。

スコーンといい音を立てて、俺の眉間にチヨークが命中した。

「授業そつちのけで女子とイチャイチャか。いい身分だな」

数学の大門先生だいまんが中指で眼鏡をくいつと上げながら、俺に冷たい視線を投げかける。同時に教室の空気が『当然の報いだこのラブコメ野郎』という雰囲気支配されていく。だれが好きでこんな状態に身を置いてるものか！ と叫びたいところだが、そんなことをしても『リア充爆発しろ！』といわれるだけだろう。

「すみません。以後気をつけます」

「ふん。まあいい。授業を聞いていないで困るのは、私じゃなくてお前自身だからな。おっと、そろそろ時間か」

大門先生がそう言うて開いていた教科書を閉じると同時に、教室のスピーカーからチャイムの合成音が流れてきた。クラス委員が号令をかけ、先生に礼をする。見つかったのが授業終了間際だったのはラッキーだったかもしれない。大門先生は、授業以外ではそんなに熱心に生徒を指導する先生じゃないことで、生徒の間では知られている。

案の定、先生はそれ以上俺を咎める事もせず、さつさと教材を片付けると、教室から出て行ってしまった。その代わりに待っていたのは、クラスメイトたちからの質問攻めだった。

「よう、みーくん。お前、さつきからずっと風香さんの方ばかり見てただろ。やつはお前たち出来てんのか？」

「え？ 俺はみーがひなたんの方を見てたのしかないぜ？ おい、みー。お前二股かけてんのかよ！」

もう誰も俺の言い訳なんか聞いてくれもしない。いつの間にか俺は『二股をかけている最低男』のレッテルを貼られてしまった。俺がいったい何をしたっていうんだ。俺は頭を抱えてへたり込みたい衝動に駆られた。その時、鈴の鳴るような、小さいけれどハッキリ

とした意志のこもった声が教室に響いた。

「みなさん、やめてください！ みーくとわたしは別になんでもない間柄ですつ。二股なんてかけられてませんっ！」

雨音は教室中が静まりかえる中、彼女に似合わないほど堂々とした態度で、騒ぎ立てていたクラスメイトたちの顔を見まわした。

「ひなたさんもそう思うでしょう？ みーくんが二股かけてるなんて、そんなことは無いって」

「え、ええ？ ぼ、ボクにそんなこと聞かれても……」

ひなたは横目で俺をちらりと見たあと小声でボソボソと呟いた。

「みーくんはボクを女の子だなんて思っでないから。ボクとみーくんは幼なじみで、親友だから……だから、二股とかそんなことは関係ない……」

ひなたが苦笑いを浮かべながらそう言うと、クラスメイトたちの視線は俺に集中した。『二人の意見は聞いた。お前はどうかんだ』と。その視線は無言の圧力を俺に加えてくる。俺は全力でその場を逃げ出したかった。と、その時、緊迫した空気の教室に気の抜けるような女性の声がした。

「は……い、みなさ……ん。お待ちかねのホームルームの時間ですよ……。席についてくださいね……。おやあ？ 何か問題でもありましたかあ？」

教室内の微妙な雰囲気を感じ取った樟葉先生が、にこやかに俺たちに問う。だが、誰も何も言わない。さっきまで俺に『二股野郎』などと罵声を浴びせていたクラスメイトも、雨音も、そしてひなたも。

「う……ん、誰も何も言ってくれないと、先生ちょっと困っちゃいますね……。どういうことかハッキリするまで……、ホームルーム続けちゃいましょうか……？」

再びクラスメイトたちの視線が俺に突き刺さる。ああ、分かったよ。俺が全て悪いことにしてやる。それでお前たちの気は済むんだろっ？

「先生、俺が風香さんとひなたの二人を二股にかけてるってみんな思ってるんすよ。俺にそのつもりが無くても、そう見えるなら多分俺が悪いんです」

「みーくんはあ、風香さんとひなたさんを二股かけてるんですか？」

俺は思わず声を荒げた。

「そんなわけ無いでしょう！」

樟葉先生は心底安心下というように微笑むと、クラスの生徒たちをゆっくり見まわしながら口を開いた。

「みーくんはとっても優しいから、転校生の風香さんを放っておけないし、幼なじみのひなたさんも放っておけない。これって二股ですか？」先生にはそうは思えませんか？」

俺に突き刺さる視線の強さがみるみる減っていく。この争いをあつというまに収めてしまうテクニクは、『かほるちゃんマジック』という名で生徒たちの間では呼ばれている。どんなヤンキー同士の争いでもすぐに収まってしまふのだ。

「では！ 帰りのホームルームをはじめましょう。号令、おねがいしますね」

\*\*\*

ホームルームが終わり、クラスメイトたちはそれぞれが所属する部活の活動場所へと向かって散っていく。俺もまたその一人で、体育館のサブアリーナでの中国武術研究会の練習に参加するため、体育館へ移動中だ。昇降口で一度革靴を履き、この学園で一番大きな建物である総合体育館へと向かう。

ひなたは武道館でなぎなた部の練習に参加するため、一足先に教室を出て行った。なんだか、俺の顔を見たくないようなそぶりを見せていたのは気のせいだろうか。

「わたし、中国武術って、本物は初めて見ますっ！ とっても楽し

みですっ！」

「はいはい。そんなに期待してるといざ本物を見たときにがっかりするかもしれないよ？」

「そんなことありません！　きつと格好いいに決まっています！」

「どうしてそう言い切れるのかなあ？」

俺がそう問うと、雨音は蕩けるような笑顔を浮かべた。あ、なんか嫌な予感がある。

「だって……うふふ……、あんなに立派な筋肉がつくんですもの。それはハードな練習をするにきまっています」

俺は黙ってカバンの中から極厚の英和辞典（カバー付き）を取り出すと、雨音の後頭部を全力で強打した。

「いた　　っ！　はっ！　わたしはどこ？　ここは誰？」

「正氣に戻ったかい？」

カバンに辞書を戻しながら、俺は雨音に問いかける。ちよつと強く殴りすぎたから、心配だったっていうのもある。

「はい！　それはもうバッチリと！　でもなんか後頭部がズキズキするんですが……」

俺が殴りつけた辺りを手でさすりながら、若干涙目になっている雨音。だが、雨音の筋肉フェチが発動したら、きつとりミッターぶつちぎって大変な事になるに違いない。具体的には天変地異レベルの大雨だ。だから、俺の暴力行為も正当化される。きつとそうに違いない。

体育館の昇降口で革靴を脱ぐと、靴を下駄箱に入れて。俺たちは体育館専用のシューズに履き替える。何でも床が傷まないようにするためだそう。まあ、結構金がかかってそうな施設だから、そういう気苦労もあるんだろう、学校としては。

「そつえば、雨音も練習に参加するんでしょ？　体操服は持っていないんじゃないの？」

雨音はその残念なほど扁平な胸を反り返して、ふふんと鼻を鳴らした。

「みーくんは大事なことを忘れています。わたしは雨の精霊ですよ？ そんなの、一瞬でぱつと作り出せます！」

でも、中国武術研究会は三分の二が女子部員なんだよな。女子更衣室でそんなことさせるわけにはいかない。見つかったらえらいことだ。

「それならトイレの個室で着替えてきます。ちょっと待ってて下さいね」

そう言い残すと、雨音は更衣室の隣にある女子トイレへと向かった。待つこと一分ほど。ジャージのズボンに半袖の体操服姿の雨音が姿を現した。ご丁寧に胸には『風香』と名前まで入っている。体操服の名前の所が全く盛り上がってないのがとても哀しい。

「やっぱり便利だよな、その『法術』。そういえば、学校に潜り込むのにも『法術』を使っただしょ」

「あ、ばれちゃいました？ その通りです。必要な書類の偽造と、先生たちの洗脳、それにクラスメイトたちに疑問を持たれないようにちよつと記憶の操作をしました」

「さらつと恐ろしい事を言ってくれてるけど、そんなに『法術』を使っても大丈夫なのか？ 昨日言ってたよね、使いすぎると消滅しちゃうって」

「大丈夫ですよ。このくらいならそんな心配しないで。も少人数に對する暗示くらいなら、目を見つめるだけでもかけられるんですよ？ いざとなったらマナの多くあるところに行つて補充すればいいんですから」

マナの多くあるところ？

それはいったいどんな所なんだろうか。いわゆるパワースポットみたいなところか？

「いえいえ。自然の多くあるところ。この前の森林公園なんかぴつたりです。草木のマナを少しずつ分けてもらつて、元氣百倍ですよ！ 特に森の中にある杉の老木が」

そこまで言つと、雨音はなぜか懐かしそうな目をして微笑んだ。

でも、その微笑みは同時に寂しさを感じさせる哀しい微笑みでもあった。その時、なぜか俺の頭の中に暗い闇のなかに泰然と立つ杉の老木の姿がフラッシュバックした。なんだろう、この違和感は。

「と、とにかく、あの森林公園はマナの補給には最適なんです！」

そんなもんなのか。とにかくいざという時には森林公園に連れて行けばいいんだな。でも、杉の老木だつて？ なんだろう、胸の辺りが妙にざわつく。頭の片隅に大きな杉の木の映像がフラッシュバックする。なんだこれ？ なんだこれ？ ぼくはそのフラッシュバックを振り切るように足を速めると、男子更衣室の扉を開こうとした。

「つて、なんで雨音まで入ろうとするんだ！」

「え？ え？ ここで練習するんじゃないんですか？」

「ここは男子更衣室だよ！ すぐ着替えるから外で待つて！」

雨音はそう言われると、入り口の『男子更衣室』のプレートを見て、耳まで真っ赤になって走り去ってしまった。まったく、先が思いやられる。

## 第二章

### 精霊は人間の常識を身につけられるか

#### 2（後書き）

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。



## 第二章

精霊は人間の常識を身につけられるか

3 (前書き)

本編第二章の3をお送りします。  
それではどうぞ！

## 第二章

### 精霊は人間の常識を身につけられるか

3

体育館のサブアリーナは、バスケットコート一面分くらいの小さな空間だ。それでも、部員が一〇名に満たない中国武術研究会の活動場所としては十分すぎる広さだといえるだろう。

俺は入り口からサブアリーナに足を踏み入れる前に一礼する。別にだれにそうしろと習ったわけではないが、練習する場所に感謝する気持ちを表すための、一種の儀礼のようなものだ。雨音もそれに倣って一礼する。

サブアリーナでは、すでに何人かの部員が思い思いにストレッチをしたり、武術書を読んだりしていた。顧問の平賀先生はまだ来ていないようだ。

「よう、みー。その子は？」

早速同年の男子部員が雨音の存在に気づいた。こいつ、手が早いで有名なんだよな……。

「今日からウチのクラスに転入してきた風香雨音さん。いつとくが手を出すなよ。変なことしようもんなら……」

「うおつ、みーくん怖ええつ！ 分かったよ！ 手は出さないよ。」

お嬢さん、この俺が道明寺由隆<sup>どうみょうじ ゆたか</sup>、みーの親友だ。よろしく！」

「誰が親友だ、誰が！ 雨音、こいつのいうことは話半分に聞いておくようにね」

雨音は小首をかしげて『？』を頭の上に浮かべていたが、やがて合点がいったように手をぽんと打ち。俺に向かってこくこくと頷いてきた。本当にわかってるんだろうか。心配になる。

そうこうしているうちに、顧問の平賀先生<sup>ひらが</sup>がやってきた。平賀先生の専門は太極拳だ。太極拳といっても色々な流派があるが、先生の一番得意にしているのは『陳式太極拳』だ。激しい震脚<sup>しんきゃく</sup>や発勁<sup>はつけい</sup>が特徴の武術で、はじめて見た人は太極拳だとは思えないかもしれない。

もちろん、陳式太極拳にも慢練まんれんというゆつくりとした練習法もあるが、やっぱり陳式の魅力はその豪快な発勁にあると俺は思う。そういうと平賀先生には「まだまだ若いなあ」と笑われてしまうんだけど。

平賀先生に雨音を紹介し、部員が整列している中に混じる。雨音は平賀先生の横に残したままだ。

「それじゃあ、今日の練習を始めます。今日は見学者がいるから、そのつもりで。風香さん、簡単に自己紹介してください」

平賀先生に促され、雨音が一步前に出る。鈴を鳴らすような雨音の声が、サブアリーナに響いていく。

「きょうからこの学園に転入してきました、風香雨音です。話からないことだらけなので、色々と教えてください。よろしく願いします！」

雨音が深々と頭を下げると、パチパチと一〇人分の拍手がサブアリーナに響き渡った。別に『法術』を使ったわけでもなさそうだが、雨音は部員たちから『仲間』として認められたようだ。

「よし。それじゃあ準備体操から始めようか。風香さんもいっしょに混じって真似してみてください」

「は、はいっ！」

準備運動はごく普通のストレッチや屈伸運動などを組み合わせたものだが、これをみっちりやると結構な汗が出る。準備運動が終わった頃には、雨音はふらふらしていた。

「風香さん、大丈夫？ 辛かったら今日は見てるだけでもいいのよ？」

部長の春日野先輩かすがのが雨音に声をかける。だが、雨音は自分の頬をピシャンとたたいて気合いをいれると、部長の目を見て言い切った。「大丈夫ですっ！ 今日練習に参加させていただくのが目的ですから、最後まで練習します！」

部長はにやりと笑うと、腰に手を当ててうんうんと頷いてみせた。そして、俺たち部員の方を向いて大声を張り上げた。

「素人さんがこんなに頑張ってるんだから、部員としては当然サボれないわよねえ？ 部員の意地って物をみせてあげなさい！」

部長のスポ根スイッチがONになってしまった。こうなると部長は手がつけれない。練習をサボろうなんて考えただけで、まるで超能力者であるかのようにその考えを読んしまうのだ。

「さあ！ 武術基本功からはじめるわよ！ あ、風香さんはまずどんなことをするのか、見ながら真似をしてみて。あとでちゃんと教えるから」

まずは蹴りの練習からだ。まっすぐに蹴り上げるもの、横に蹴り上げるもの。斜め前に蹴り上げるもの。外回し蹴り。内回し蹴りなどがある。他にも種類は何種類もあるが、太極拳ではだいたいこの程度と、あと二起脚という飛び二段蹴りを練習する程度だ。

サブアリーナの端から端までをひたすらに足を蹴り上げながら往復するのは、想像以上にキツイ。長いことやってる部員の俺ですらキツイのだから、雨音はどんなに辛いだろう。そう思っただけで雨音の様子を窺ったら、これがなんと、見事に様になったフォームで蹴り技をこなしているではないか。他の部員も驚いた様子で雨音を見ている。

「ほらほら！ 風香さんに見とれてないで自分の練習をする！ しつかし驚いたわ。風香さん、あなた何かの武術の経験者？」

「いえ、こういうのは全く初めてなんです」

「ふーむ。飲み込みが早いっていうか、早すぎるわ。平賀先生、どう思います？」

「何力所か注意しただけでこの出来だからね。彼女は武術に向いているのかもしれないな」

俺は基本功を終えて戻ってきた雨音に、周囲に聞こえないくらいの声で囁いた。

「『法術』、使っただろ」

「あはっ、ばれちゃいましたね。みーくんのフォームをコピーするように身体を動かしてみたんです」

そりゃばれるさ。なんの経験もない女の子が、いきなり武術基本  
功をやらされて、それを完璧にこなしちゃうんだから。

「まあ、他の部員にばれなきゃいいんだけど、程々にしといてよね。  
あんまり注目されるとやりにくくて仕方ないから」

雨音はすこししゅんとしたあと、俺を上目遣いに見上げてこうい  
った。

「じゃあ、もうズルはやめます。でも、いきなり下手くそになっ  
たら、その方が注目されちゃうんじゃないでしょうか？」

「分かった分かった！ 『適度に』なら『法術』をつかっていいか  
ら！」

俺の言葉を聞いた雨音は、あの森林公園で見たヤマユリの花のよ  
うな笑顔を見せてくれた。参ったな、俺の完敗だ。

\*\*\*

練習を終えて、シャワーを浴びて制服に着替えて更衣室を出たら、  
そこにはすでに雨音が真っ白のワンピースにつばの広い帽子を被っ  
て待っていてくれた。どうやらまた『法術』を使ったようだ。女子  
部員たちは雨音と一緒に着替えをしたと思い込んでいる。

「風香さんってすごいスレンダーなのよねえ。羨ましいわ」

いや、スレンダーなのは確かだが、もう少しお肉がついてもいい  
所もあるんですよ、部長には分からない苦労かもしれません。か  
くいう中国武術研究会部長、春日野陽子先輩は、見事なダイナマイ  
トバディの持ち主である。でるところが出てて、引っ込むところが  
引っ込んでいる。全校の男子生徒の垂涎の的である。

「部長さんこそ、その、胸が……」

記憶操作の時にでも見てしまったのだろうか、それとも制服のブ  
ラウスを押し上げる胸のボリュームに圧倒されたのか、雨音は最後  
まで言葉を紡ぐことが出来なかった。

「ああ、これね……。ウチとしてはもう少し控えめな方が嬉しいん

だけだね。男子のいやらしい視線が絡みついてくるのよ」

「部長さんも大変なんですね……」

なにやら訳の分からない事で意気投合した二人はダイエット法やら豊胸体操やらの情報を交換し始めた。そうか、一応雨音も自分の胸のことは気にしていたんだな。

「みーくん！ 雨音ちゃん！ 一緒に帰ろう！」

体育館の昇降口をみると、長刀袋を持ったひなたが靴を履いているところだった。防具一式も持って帰るから、小柄なひなたとしては相当の大荷物だ。部室に置いておけばいいものをと俺が言うといひなたは決まってこう言うのだ。

「部室に置いておいたって別に怒られやしないんだけどね。なんて言うのかな、はじめだよ、はじめ」

「ひなたさん！ ひなたさんも部活終わりですかっ？」

「うん。ボクたちの部は着替えに時間がかかるから、ちょっと早めに稽古が終わるんだ。で、着替えて帰り支度をするこの時間、つてわけ」

「そうですか。今日、わたし中国武術の奥義に触れましたっ！」

「そうかそうか。みーくんもうかうかしてると、雨音ちゃんの方が強くなっちゃうかもしれないよ？」

ひなたは何だか妙に明るく振る舞っている。そう、まるでわざと明るく見せようとしているかのように……。そういえば不自然じゃないか。いくら仲良くなったからって、そこまで雨音に気を遣うなんて、ひなたらしくない。「ボクがみーくんを一生面倒見てあげるよ」なんて冗談めかして言っていたひなただぞ？ 突然俺たちの間に現れた雨音に気を遣うなんておかしい。絶対におかしい。

その時俺は電撃にでも打たれたかのように気づいてしまった。雨音はひなたにも『法術』を使っている。そうでなければ、昨日の朝あんなに雨音を激しく罵っていたひなたが、こんなに雨音と仲良くなれるはずがない。

もしかして俺本人も気づかないうちに『法術』の影響を受けてい

たりするのか？ いや、もしそうだとしたら、こんな風に疑問を持つこともないはずだ。それに、雨音は一昨日の夜にウチの屋根をぶち破って登場してから、『法術』を使う事を俺には隠していない。

考えすぎだ。雨音のあの無垢な笑顔を見ても。そんな疑いを持たれてると知ったら、きつと涙の大雨を降らせるに違いない。俺は何となく釈然としないものを感じながらも、その疑問を飲み込んだ。

\*\*\*

「ところで、今日は雨音ちゃんがみーくんのお弁当作ってきたですよ。明日はボクがつくってきてもいいかな？」

「この前俺たちをサンドウィッチで殺しかけた上に、いつも俺が起こしに行くギリギリまで大お布団帝国の女帝の座に納まっているひなたが、何を作るって？」

ひなたはぷうつと頬を膨らましジト目で俺を睨み付ける。俺は何も嘘は言っていないぞ？ 違うというのなら証拠を提出してもらおう。ああ、休日だけは何故か早起きだよな、ひなたは。

「ひどい言われようだよ！ 日曜の朝はスーパーヒーロータイムを見るために意地でも起きなきゃいけないって前にも説明したじゃないか！ それに、ボクだってやる気になればお弁当の一つや二つちよちよいのちよいで作れちゃうんだから！ お母さんも手伝ってくれるし！」

ちよちよいのちよいの中にどれだけひなたの母さんの腕が含まれるのかは、まあこの際目をつぶっておいてやるう。まあ、ひなたの母さんが手伝うなら、任せてもいいか。

「んじゃ、決まりだね。明日はボク、明後日は雨音ちゃん。交代でみーくんのお弁当作ろう！ そうとなったら早速メニューを考えなきゃ……」

ひなたは何やらブツブツと口の中で呟きながら思案モードに突入してしまった。俺も冷蔵庫の中の食材が残り少なくなって居ること

を思い出し、買い物に行かなきゃならないなと一人思うのだった。学校帰りにもスーパーはある。だが、ひなたの大荷物を考えれば、一旦帰宅してから買い物に出るしかないだろう。それに、うちの近所のスーパーは深夜まで営業している。慌てることはないさ。

そうこうしているうちに、短い通学路は終わりを告げ、我が家が見えてきた。ひなたは一つ手前の家の門扉に手をかけ、にやりと不敵な笑いを浮かべると、実に愉しそうに俺に向かって口を開いた。「ふふふん。ボクの料理の腕の上達ぶりを、あした存分に味あわせてあげるよ。楽しみにしてるがいい！ ふははははは！」

何だか悪の帝王が勇者に向かって言うセリフみたいだな、などと思っていると、ひなたはちらりと雨音の方をみやり、控えめにVサインを出していた。雨音も両手でVサインを返している。ほんと、この二人がなぜここまで仲良くなったのか。さっきの嫌な考えが頭をよぎる。

雨音がもし、ひなたに対して『法術』をつかっているとしたら、俺はそれを止めるべきだろうか？ それとも二人の間の潤滑油としてそれを認めるべきだろうか。

二人の仲よさげなそぶりをみていると、俺にはよけいに分からなくなっていた。

\*\*\*

自宅に帰ってすぐ階段を上がり、自室で着替えを済ませ、リビングに降りる。雨音はいつもの通りの白いワンピースに白リボンのついたいつば広の帽子を被って俺が降りてくるのを待っていた。買い物に行こうと、俺から誘ったからだ。だが、買い物に行く前に、どうしてもハッキリさせておきたいことがあった。

それは、ひなたにも『法術』を使ったのか否か。俺はそれが悪いことかどうか分らない。でも、偽物の友情に価値があるのか、と聞かれたら、多分俺は「無い」と答えるだろう。



「雨音、雨音はひなたに『法術』を使ったのか？」

最後の方は声がかすれて、震えていた。どうか、俺の想像が外れていますように。どうか、ひなたと雨音の友情が、真正正銘の本物でありますように。しかし、その願いは簡単に打ち砕かれた。

「はい、ひなたさんは最初にわたしの正体を明かした時の反応を見て、好ましがらざる人物だと判断して、記憶を少し改ざんさせていただきました」

俺は真っ暗な終わりのないトンネルに放り込まれたような気分になった。雨音のあまりに冷たい物言いが、俺の心に氷の刃のように突き刺さる。それじゃあなにか？ ひなたと仲良くして見せていたのは、嘘っぱちだったってことか？

「そんなことつてあるかよ……」

「みーくんは何か大きな勘違いをしています。わたしが『好ましがらざる』人物と判断したのは、わたしがこの場に留まることの障害になる、という意味です。決してひなたさんを嫌いなわけじゃありません。ひなたさんは、多分お友達になれるひとです。でも、わたしが地上にいるのは、みーくんの願い事を叶えるまでの短い間です。それが終われば……」

「それが終われば……みんなの記憶を消して、はいさようなら、つて事がよッ！」

雨音は俯いたまま何も言わない。そんな悲しい話つてあるか？

雨音だけがおぼえていて、他のみんなは忘れちゃうんだぞ？ そんな悲しいこと、俺は許さない。そんなことを言うヤツは、例え神様が相手だって殴りかかってやる。雨音と学校の連中の関係は、雨音の『法術』を介した、言わば偽物の友情だ。でも、そんな友情でもほんの短い間の思い出として、残してくれたっていいじゃないか。

「俺は……忘れないからな。雨音がどんなに記憶を弄ろうが、絶対に思い出してやる」

「みーくんの記憶は弄りませんよ。雨の精霊を受け入れてくれた、広い心のみーくんですから」

そのとき、二人のお腹が同時にぐうつと大きな音を立てた。気ま  
ずい沈黙が二人の間に落ち、それはやがてこらえきれない笑いにな  
って爆発した。

「はははっ！……はあ。とにかく、買い物に行こう。今日は俺特  
製の担々麺だ！ 四川人も涙を流して喜ぶ一品だぞ！」

「なんでみーくんは四川料理ばかり得意なんですかつ！ あんま  
り辛い物ばかり食べてると馬鹿になっちゃいますよっ！」

そう。偽物の友情でもいい。でも、その記憶だけは消して欲しく  
ない。雨音だけがおぼえている俺たちと過ごした日々の記憶なんて  
悲しすぎる。

だから、俺は絶対に忘れないと決めたんだ。

## 第二章

### 精霊は人間の常識を身につけられるか

#### 3（後書き）

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せくださいませ。

## 第二章 精霊は人間の常識を身につけられるか

4（前書き）

第二章の4をお送りします。

それではどうぞ！

翌朝、俺が起きてみると、キッチンではすでに雨音が朝食の支度をしていた。いつもの白いワンピースではなく、学園の制服の上にエプロンをつけてである。雨音は何を着ても似合うな、と思うと同時に、やはりとっても残念な感じに平べったい胸に目がいつてしまふのは仕方のないことだろう。

「あ、おはようございます！ どうです？ 今日からは制服で通学ですよ！」

お玉を手にくるりと廻ってみせる。短いスカートの裾が翻って、細いけれど柔らかそうな雨音の太腿がギリギリの所まで露わになる。

「あー、みーくん、なんかえっちな目でみてましたね？」

「そそそ、そんなことはないぞ？ 気のせいだ気のせい」

「ホントですかあ？ 目が泳いでますよ？ まあいいです。通学力バンも靴も用意しましたから、今日からは普通の女子高生です！」

雨の精霊が普通の女子高生とか言っちゃってるよ。それにしても、なんとも嬉しそうだな。そんなに制服が着たかったのなら、初日から『法術』で作ってしまえばよかったのに。

今日はダイニングテーブルの上には俺の弁当は置いてなかった。

その代わり、小さめの弁当の包みが置いてある。これは雨音の弁当だろう。テーブルの上には目玉焼き、野沢菜の巻おにぎり、味噌汁が並んでいた。

野沢菜の巻おにぎりは、見た目は和歌山のめはり寿司みたいな感じで、おにぎりを野沢菜の葉っぱでくるんである。味噌汁はしじみ汁。しじみ独特の風味が出ていて、これだけでご飯が何杯もいけそうだ。目玉焼きは綺麗な半熟。ちよつと醤油をたらしていたく。

雨音もテーブルの反対側で同じ物を食べている。ただし、全体的に量は少なめだ。

「食物からもマナを取り入れることが出来るんです。ただ、効率は

あまりよくないんですけど。この前森林公園に行った時、思いつきりマナの補給をしましたから、当分はマナが切れることを心配しないでも大丈夫ですっ！」

「つまり、べつに食事をとらなくてもいいってこと？」

「いえ、やはりこうして受肉して肉体を持つていると、どうしても生理現象は現れますし、当然お腹も空くんです。食べなくても死にはしないんですけど、やっぱりお腹が空いたらご飯を食べるのが一番です！」

精霊が肉体を得て地上に留まるのも、なかなか大変な様子だ。

雨音は先に朝食を食べ終え、俺が食べ終わるのを待ってくれていた。食器を流しで水につけておく。帰ってから俺が食器洗いをするのだ。夕食も俺の担当。昨日の担々麺もなかなか好評だった。しかし四川料理ばかりじゃ確かに飽きがくるな。今日は和食にするか。朝食を食べ終え、朝のテレビニュースを何とはなしに見ていると、玄関のチャイムが軽快な音を立てて鳴った。

「きつとひなたさんです！ わたし出てきますね！」

「ふむ。どうやらちゃんと起きられたみたいだな。奇跡は起こる物なんだなあ」

「何を失礼な事を言ってやがりますか、みーくんは」

一人感慨にふけっていると、背後から怒りのオーラをまとったひなたの声が投げかけられた。俺の背中を冷たい物が伝う。壁に耳あり障子にメアリー。敵はいつどこで俺の言葉に耳を傾けているか分からないのだ。

「はい、これ。約束のお弁当。言っとくけど、味はお母さんの保証付きだからね。食べてびっくりするがいいさ！」

悪い意味でビックリだったら困るけど、良い意味でびっくりするのは悪くない。あの殺人料理人のひなたが、人の食べられるものを作るようになった。俺はとっても嬉しいよ。これでいつ嫁に出しても大丈夫だ。

「あのねえ。ボクはまだ一七歳だよ？ 嫁に出すって、いつたいい

つの時代の話さ」

「結婚自体は一六歳から認められてるぞ？」

「そうじゃなくて！……みーくんはボクが他の人のお嫁さんになっちゃうても構わないんだね……」

「え？　なんだって？」

ひなたは何となく寂しそうに顔をうつむけると、唇を尖らせて拗ねた表情をして見せた。時々ひなたが見せる表情だ。いつからかは忘れたが、ひなたは時折この表情をする。何が不満なのかを聞き出そうとしても、ひなたは一切口を割ろうとしなかった。

「そういえば、雨音ちゃん。制服出来たんだね。すごく似合ってるよ！」

「えへへっ。ありがとうございます！」

ひなたに褒められたのが余程嬉しかったのか、雨音はまたその場でくるりと一回転してみせた。またしてもスカートが翻り、いけない部分が視界に入りかける。と、雨音とひなたがジト目で俺をじっと見ているのに気がついた。

「みーくん、やっぱりいやらしい目でわたしをみてましたっ！」

「変態の目だったね、今は。雨音ちゃん、夜はちゃんと部屋に鍵かけて寝た方がいいよ」

ひどい言われようではあるが、確かに今は俺の落ち度だ。多分そうとういやらしい視線を送っていたに違いない。

「さ、さて、そろそろ学校に行くか！」

俺は二人の冷たい視線を背中に受けながら、鞆とスポーツバッグをもって玄関へと向かった。スポーツバッグの中には、ひなた謹製の弁当が入っている。味はおばさんの保証付きだ。ならば問題はないだろう。

「朝練に送れるから、先に行っちゃおうぞー！」

「ああっ！　まってよっ！　ボクもいくから！」

「わ、わたしも行きますっ！」

しかし、雨音の『法術』の影響はすごいものがあつた。誰も雨音の存在に疑問を差し挟むものはいなかったし、極々自然に俺たちのコミュニケーションに入り込んで、ごく普通に振る舞っている。だが、どうも雨音には『人間の常識』というものが今ひとつ理解出来ずにいるように思う。

例えばだ。年頃の男と女が同じ中身の弁当を仲良くつついていれば、それは『出来ている』ということの意味していて、『リア充爆発しろ!』という怨嗟の聲がそこから聞こえてくるものである。不思議とひなたと俺が仲良くしていても、そんな噂は立たないのだが、雨音と俺の関係はクラス中の噂になってしまっていた。こういうときにこそ、雨音はその『法術』を解き放つべきだとおもうのだが、どうやら彼女にその気はなさそうだ。

今もクラスの女子生徒から質問攻めに遭っている。どうやって知り合つたのかとか、どこまで行つたのかとか。

「どこまでって言われましたも……。あ、日曜日に森林公園まで行きましたね。とっても綺麗な紫陽花やヤマユリが咲いてましたよ!」「そうじゃなくて! あーもう、風香さんってもしかして天然系?」「だから、手を握つたとか、キスしたとか、それ以上とか……。そういうことよ」

小首をかしげていた雨音は、キスという単語を聞いたとたん、頭から湯気が出るほど赤くなって、あたふたと周囲を見まわした。周りでは雨音の返答を楽しみにしている野次馬どもが耳を澄ませている。

「え、ええと、き、キスとかそういうのは全くないです。手もつないでません! そんなのともありません!」

雨音のその答えに、ギャラリーたちは一斉に肩を落とした。そして、その怒りの矛先は当然のように俺に向かつてきた。

「ちよっと、みーくん。あなた、雨音ちゃんがこんなに良くしてく



れてるのに、手もにぎってないの？」

「あなたがヘタレの甲斐性なしだってことはみんな良く知ってるけど、それにしても、ねえ？」

まるで俺が雨音になにかした方がいいような言い方だな。俺が『雨音……ハアハア……そのぺたんこの胸にキスさせてくれ……ハアハア』とか言うような変態の方がいいってのか、このクラスの女子連中は！

「ね、ひなたもそう思うでしょ？ あんたは幼なじみなんだから、このヘタレ甲斐性なしになんか意見してやらなきゃダメよ」

「ボ、ボクは……、みーくんとは単なる幼なじみだし、ただの友達だし、だから……」

ひなたの声がどんどん小さくなっていく。それに反比例するように、顔が赤らんできた。何でだ？ 今の会話のどこにひなたが赤くなる要素があるっていうんだろう。

「分からないの？ みーくん、ひなたはね、あなたのことがす……」  
「やめてよっ……！」

パシンと乾いた音が教室に響き渡る。ひなたが女子生徒のひとりをつっぱたいしたのだ。ひなたは肩で息をしながら、真っ赤な顔でその女子生徒を睨み付けている。目には光る物がたまり、やがてそれは目尻から溢れ、頬に伝った。

しばらくその女子生徒を睨め付けていたひなただったが、涙が溢れ、床にぼつぼつと落ちるようになると、教室の後の扉から廊下へ飛び出してしまった。俺があっけにとられていると、「雨音がひなたの後を追おうとして席をたった。俺はなぜだかそれが良くない方向に働くような気がして、雨音呼び止めてしまった。」

「雨音……いまは放っておいてやったほうがいいと思う」

「なんでですかっ！？ ひなたさん、泣いてたんですよっ！」

俺には具体的な理由が説明出来なかった。ただ、ひなたは今一人になりたいのではないか、そう思ったただけだ。その時、頭の中に雨音の声が響いてきた。耳を通してじゃなく、直接頭に響いてくる。

これも雨音の『法術』なのか？

『そうです。今わたしはみーくんの心に直接話しかけています。声を出さなくても会話が出来ます。なぜ、ひなたさんを一人にした方がいいのか、その理由を聞かせてくださいますか？』

『はつきりした理由は俺にも分からない。ただ、あんなひなたは初めてみた。ひなたも誰にもあんなところを見られたくないはずだ。だから追うなと言ったんだ』

雨音は静かな瞳でじつと俺を見つめてくる。数瞬の時間が、永遠の長さに感じる。雨音はその深い色の瞳で、俺の心の奥底を覗いてくる。しばらく沈黙が続いた後、雨音は静かに自分の席についた。『わかりました。ひなたさんのことは、わたしよりみーくんが良く知っているはずです。そのみーくんが一人にしておいた方が良くいうのですから、おそらくそうなのでしょう』

『分かってくれて助かる。別にあいつに冷たくしてるわけじゃないんだ。人間なら、ああいうとき一人になりたいと思うこともあるってことさ』

雨音は鞆から数学の教科書とノートを取り出しながら、視線はこちらに向けずに『法術』をつかった会話を続けてきた。

『わたしは基本的に人間とはちがう、雨の精霊です。人間の常識は知識としては持っていて、良く理解できないところもあります。もし、わたしが間違いを犯しそうになったら、また止めていただけますか？』

『わかった。ただ、自分で考えることをやめないで欲しい。人間なら、だれでもまずは自分で考えるものだからね。おっと、先生が来たな』

教室の前から数学の大門先生が姿を現すのと同時に、雨音の『法術』をつかった会話も打ち切られた。ふと左隣の席に視線をやると、雨音が静かに微笑んでいた。それは多分彼女本来の優しさから出てきた笑みのだと俺は感じた。

ひなたは授業が始まって二〇分ほど経ってから戻ってきた。先生

には「保健室に行っていた」と言っていたが、多分違うんだろう。顔を洗ってきたらしく、涙の後は頬に残っていなかった。だけど、赤い目がどれだけ泣いてきたかを物語っている。本当に俺がひなたを一人にさせてやろうと言ったのは間違いじゃなかったのだろうか？　もしかしたら、俺が追いかけていった方が良かったんじゃないか？　ひなたも、それを待っていたんじゃないのか？　尽きることのない疑問が頭の中をぐるぐる廻る。

右隣のひなたの席を見る。じっと見ていると、視線に気づいたのかひなたも俺の方を見つめ返してきた。ほんの短い間、視線が絡まる。ひなたの視線には、何かを言いたいのが、それは言うてはいけないことだというような色が滲んでいた。それはいったい何なのだろう。

俺はひなたが密かに胸の内に隠している気持ちに、この時まで全く気づいていなかった。

\*\*\*

その日、ひなたは体調が悪いといって部活の稽古を休んだ。風邪で熱があっても稽古に参加する、あの元気印のひなたが、である。当然、部活が終わっても、いつも昇降口で待っていてくれる彼女の姿は無い。

「みーくん！　帰ろっ！」

いつも大荷物を持って、俺が着替えるまで待っていてくれるひなた。それが帰りの時間にいないというだけで、何故こんなにも寂しい気分になるのだろうか。帰り道なんて、ただか一五分くらいのものなのに。

「みーくん、わたし思うんですが……」

校門から伸びる緩く長い坂道を下りながら、雨音が口を開いた。

「ひなたさんは、みーくんのことが好きじゃないでしょうか？」  
その一言で、俺は心臓がぎゅっと締め付けられるような気がした。

ひなたはただの幼なじみ。きっとそれはひなたも同じ想いのはずで……。

『やめてよっ!!』

あの女子生徒は、きっとひなたは俺のことを好きだと言おうとしたんだろ。それをひなたは引っぱたいて止めた。ひなたは、それを認めたくなかったのだから。自分が俺を好きだという気持ちに蓋をして、誰にも見せないように隠していたのだから。

「ねえ、みーくん。わたしは雨の精霊ですけど、同時に女の子でもあります。人間の常識がどうのという前に、女の子の気持ちはわたしにも分かるつもりです。だから、いまからひなたさんの家に行きましょう」

「そう言うと思ってたよ。分かった、行こう」

坂道を降りきつて。バス道路を市街地へ向かって歩き出す。あと一五分もしないうちに、ひなたの家に着してしまふ。ひなたを前にして、俺はなにを話すべきなんだろう。そして、雨音は何を言うつもりなんだろう。

やがて道は見慣れた住宅街に入っていく、何回か角を曲がったところでひなたの家の屋根が見えてきた。

「いよいよか……。何を話せばいいんだろうな」

「それはわたしに任せてください」

雨音は玄関のインターホンのボタンを押した。

「はい。どちら様ですか？」

ひなたの母親の聞き慣れた声がインターホンのスピーカーから流れてくる。雨音は物怖じすることなく、用件を伝えた。

「わたし、ひなたさんのクラスメイトの風香雨音といます。ひなたさんはいらっしゃいますか？」

「ごめんなさいね。ひなた、まだ帰ってないんですよ。もうすぐ帰ってくると思いますから上がってお待ちになる？」

「はい、ご迷惑でなければ」

「じゃ、ちょっと待っててくださいね」

待つこと一分ほど、玄関の扉が開いてひなたによく似た女性が現れた。ひなたと並んで「姉です」と言われたら、無条件で信じてしまいそうになるほど若い。それでももう三〇代の半ばを過ぎているのだが。しかも、このお母さん、近所でも評判のスーパー主婦なのである。完璧超人と言ってもいい。それについてはそのうち話す機会もあるかもしれないな。

「あら、みーくんもいつしょ？ そちらの……風香さんでしたっけ？ 彼女はもしかして」

「違います！ おばさんが考えてるような関係じゃありませんから！」

「あらあら。ムキになるあたりが怪しいわね。じゃあ、上がってちようだい。散らかってますけど」

おばさんは、俺たちを玄関に招き入れた。廊下を歩き、リビングに通される。ソファーに座ると、おばさんが麦茶の入ったボトルと氷の入ったタンブラーを持ってきてくれた。梅雨の晴れ間というところで、気温も高く湿気もきつい。そんな時にはよく冷えた麦茶が一番だ。

「ありがとうございます。俺、のどカラカラだったんです」

タンブラーに注がれた香ばしい褐色の飲み物を、俺は一気に半分ほど飲んだ。雨音はちびちびと口をつけている。そのとき、玄関の聞く音とともに、ひなたが帰りを告げる声が聞こえた。

「たっだいまー。うーじめじめするし暑いし最悪〜。あれ？ だれかお客さん？」

俺は今この瞬間にもこの場から全力で逃げ出したいと思った。だいたい、何を話せばいいのかが分からない。雨音は自信ありげに任せるといったけど、その自信はいつたいどこからやって来るのかと問いたい気分だ。

「おかえりなさい、ひなたさん。わたし、あなたにお話があつて待たせてもらいました」

「……なに？ 別に雨音ちゃんとボクが話し合うようなことはなか

「つたはずだけど」

「みーくんへの気持ちのことです。わたし、どうしてもあなたがみーくんを『ただの幼なじみ』として見てるとは思えないんです。ひなたさん、あなたはみーくんのことが好きなんですね？」

ひなたは両の手を白くなるほど固く握りしめて、口を一文字に結び、下を向いてしまった。顔は耳まで赤く染まり、まるで今日の教室での出来事の再現のようだ。これでひなたが雨音を引っぱれば完全再現といったところか。

「そうだよ……ボクはみーくんが好き。どうしようもないほど好きでも、好きになっちゃいけないの。だから自分のことを『私』って呼ぶのもやめて、『ボク』って言うようになって、服も男の子みたいな服ばかり着るようになって……、そしたらみーくんが前よりずっと付き合いやすいって言うてくれて……。だからボクは自分の事を女の子だと思うのをやめたんだ。小学二年のあのときから」

俺は思い出していた。ひなたは以前は髪を長く伸ばし、女の子らしい服を好んで着ていた。一人称も『私』だった。自分をまるで男の子のように扱いだしたのは、そう、あの時だ。小学校の二年生の時、ひなたとばかり遊んでいた俺は、クラスの男子から『女とばっかあそんでる』と馬鹿にされたのだ。

『みーくんはいつもひなたんとばっか遊んでて、さいきん《おとこのゆうじょう》を大事にしてないよな！ みんなもそう思うだろ？ おんなとばっか遊んでるヤツは仲間なんかじゃないよな！』

幼かった俺は、ひなたを突き放すことしか出来なかった。そして数日後、ひなたは長かった髪をバツサリと切り、服もボーイッシュな物ばかりを着るようになった。単純だった俺は、これで男子ともひなたとも一緒に遊べると喜んだものだ。

ひなたの両目から熱い滴がぱたと落ちて、絨毯に染みを作る。雨音は黙って立ち上がり、そっとひなたを抱きしめた。

「大丈夫ですよ、ひなたさん。あなたは男の子じゃないし、みーくんだってあなたを男の子だなんて思ってますん」

「……本当？」

「本当です。ただ、ひなたさんとの距離が近すぎて、みーくんはどう接していいのか分からないだけです」

華奢な雨音の右手が、そっとひなたの髪を撫でる。何度も、何度も。

「でも、今更ボクは自分の事『私』なんて呼べないよあ……」

「それも大丈夫。別に急に変わる必要はないんです。ゆっくり時間をかけて、少しずつ変わっていけばいいんです。みーくんとの関係もそうです。焦らないで、ゆっくり変えていけばいいんです」

ひなたは雨音の肩に頭を預け、静かに涙を流し続けた。俺は雨音とひなたの、その神聖な儀式を、黙って見守ることしか出来なかった。やがて、ひなたが雨音の肩から頭を離れた。それに応ずるように、雨音の両手もするりとひなたを放していた。涙の跡がくつきり残るひなたの頬。だが、何かを吹っ切ったように、その瞳は明るい光を宿していた。

「雨音ちゃん、ありがとう。それと、みーくん。ボクみたいながつ子でも、今まで通りそばにいていいのかな」

俺の答えは決まっていた。そんなの一つしかないじゃないか。

「ひなたは俺の大事な幼なじみだ。今はそこまでしか言えないけど……。もしかしたらこの先違う関係になるかもしれないしな。だから、今まで通り一緒に下らないこととして笑ってようよ」

ひなたはその日初めて日だまりのような笑顔を俺に見せてくれた。

## 第二章

### 精霊は人間の常識を身につけられるか

#### 4（後書き）

いかがでしたか？  
もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。



**幕間劇**

**T  
w  
e  
l  
v  
e  
  
Y  
e  
a  
r  
s  
  
A  
g  
o  
:  
:  
:**

**(前書き)**

幕間劇です。十二年前のある梅雨のお話です。

幕間劇

Twelve Years Ago...

わたしがみーくんのおうちにお世話になるようになって、今日で三日目。地上での生活にもすっかり慣れました。クラオカミさまに『地上研修を命ずる』って言われた時は、ホントにわたしなんか勤勉なものかとドキドキしちゃいましたけど。

今日もわたしはみーくんの朝ご飯を作ります。お弁当は今日はひなたさんが作る番。とっても元気な、お名前の通りのあったかい女の子です。でも酷いんですよ？ 会うなりわたしのことを『デンパ女』なんて言うんですから。たしかに超常現象の一つや二つは起こしますけど、『電波女』はないと思います。それじゃあ、まるでわたしが電子レンジみたいじゃないですか。

学校に行くのもやっぱりドキドキします。どんな人たちが集まっているのか、空の上からは仲間に入れてもらいたくても入れませんでしたから。二階で目覚まし時計が鳴ってます。みーくんがお目覚めのようです。お、おはようのキスとか、そんなのは全然ありませんから！ 本当ですからねっ！

大体、わたしがみーくんのおうちにいるのは、そんな男女の同棲とかそういうんじゃないって、わたしの上司のクラオカミさまの命令によるもので、れっきとした『研修』という名のお仕事なんですから！

でもまあ、みーくんはわたしが初めて地上におりた十二年よりずっと遅しく、男らしくなっていました。みーくんはわたしが偶然みーくんの家に落ちてきたと思ってるようですが、ちょっと違うんです。

わたしが最初に地上に来たのはちょうど十二年前の、やっぱり梅雨の季節でした。

\*\*\*

その日、まだ幼かったわたしは、『法術』の使い方を誤って、地上に落ちてしまったんです。そこは、とある男の子のおうちのお庭でした。時刻はまもなく日も暮れようという黄昏時。彼とわたしはその時に初めて出会ったのです。当の男の子本人はすっかり忘れ去つてゐたのですけどね。いいんです。『法術』でわたしとの思い出は消えているはずですし、そんなことしなくても、どうせわたしは存在感薄いですから。印象にも残らなかったでしょう。

「おまえ、どこの子？」

「……お空のうえ」

「……何言つてんの？」

そのとき、男の子に頼んだことが「木の多いところに連れて行って欲しい」ということでした。そう、マナがあれば空に帰れるからです。でも男の子は「お山とかは子供だけで行ったら怒られるんだぞ」と行ってなかなか首を縦に振ってくれません。わたしはピーピー泣いて、雨をざんざん降らせながら連れて行つてと連呼しました。「分かった！ 分かったから！ 連れて行ってやるから、ちよつと待つてろ！」

男の子は補助輪付きの自転車を引つ張り出すと、わたしに一言「後ろに乗れ」と言つて自転車にまたがりました。わたしは自転車なんて初めてだったけど、足を揃えてなんとか横座りで乗ったんです。でも、その男の子は「そんなんじゃ落っこちる。もつとしがみつけないでいいんです。わたし、男の子にしがみつくななんて初めてで、どうしていいか分からなくて、そしたら男の子は「お腹のところまで手を回して、そう、それで自分の手を持って」と教えてくれました。そしたらどうでしょう！ ぐらぐらしてた身体が男の子の身体とびつたり合わさつて、自転車が走り出しても振り落とされることなく乗れているじゃありませんか！

私はどんどん後に流れていく街の景色に見とれていました。あんまり見とれすぎていて、自分が泣いていたこともすっかり忘れてし

まっつて……。ふと空をみると夕焼けが西の空を真っ赤に染めていました。東の空は群青にそまっつていて中間は綺麗なグラデーションを描いています。

森林公園までの坂は自転車じゃ上がれないということで、歩いて上ることになりました。男の子はわたしの手を握ってずんずん歩いて行きます。心細かったさっきまでの自分が嘘のように、偶然出会った不器用だけど優しい男の子に手を引かれて、わたしはいつの間にか笑顔になっっている自分に気づきました。

男の子も「疲れてないか」とか「お水飲みたくないか」とかわたしを気遣ってくれました。そして、時々見せてくれる笑顔に、わたしの心臓はドキドキしっぱなしでした。

やがて、鉄の柵が周りを囲んだ、大きな森林公園が見えてきました。でも、もう閉園時間を過ぎていて、人は入れません。そしたら男の子は「こっちに抜け道があるんだ」と言いながらゲートよりさらに山の方へと歩いて行きました。そこにはフェンスが壊されて、人が一人ちようと通れるくらいの穴が空いていました。

「僕たちがやったんじゃないぞ。中学生のお兄さんたちがやったんだ」

「中学生になったら、こんな事をしてもいいの？」

「そんなことあるわけ無いだろ！ 悪いことだよ！」

わたしはそれを聞いてとって怖くなりました。わたしは悪いことをしようとしてる。悪い子になっちゃう。そしたらクラオカミさまに怒られちゃう！ わたしは怖くて怖くてまた泣き出してしまいました。さっきまで晴れていた夕焼け空が、あっという間に雲に覆われて、ぽつり、ぽつりと雨粒が落ちてきました。

「木の多いところに行きたいんだろ？ もうこの時間じゃあ、ここからじゃないと入れないんだ。泣いてないでついて来い！」

わたしは泣きながらフェンスの穴をくぐりました。せつかくの真っ白なワンピースが、土で真っ黒です。その事実もわたしの涙に拍車をかけました。わたしが流す涙の量に比例して、空から落ちてく

る雨粒の量も増えていきます。

「くそっ、雨が……。足下滑るから気をつける！」

ぐすぐすと鼻をすすりながら涙を流すわたしを励ますように、男の子の右手がわたしの右手をしつかりと握ってくれています。その暖かさは、わたしのこころに勇気の光を灯してくれました。男の子はポケットを探ると、小さな懐中電灯を取り出して明かりをつけました。辺りはすでに夜の闇に包まれようとしています。

「大丈夫。ここは何度も歩いたことがあるから、ちゃんと戻ってこれるから」

わたしは「もどるのはあなただけでいい」と言いたかったのに、口に出して言えませんでした。

\*\*\*

幼い脚には過酷な山道をどのくらい歩いたでしょうか。わたしには一本の木が見えてきました。立派な杉の老木で、あたりにマナを放出するその様子が、まるで空から眺めたクリスマスツリーの電飾のようでした。わたしがその木をじつと見ていると、どうやらその杉の木がわたしの求めている木だと気づいたのでしよう。男の子はまっすぐその杉の木の方向へ進路を変えてくれました。

「あの木に用があるんだろ？」

「うん……」

杉の根元まで来ると、わたしは切れていたマナを木から分けてもらう『法術』を発動させました。空中のマナも光を放ちながら、わたしの周囲で渦を巻いています。ああ、こんなところを見られたらわたしはきつとお化けだと思われてしまう。この男の子に嫌われてしまう。そう思うと、また涙が出そうになってきました。

でも『法術』の最中に心を乱すことは出来ません。もし失敗したら、場合によっては街一つくらい簡単に地上から消してしまえるほどのマナが集まっているのですから。そうなったら、この男の子も

無事では済まないはずです。だから、暴走だけはさせられない。わたしは必死に集中しようと思いました。その時です。男の子の叫び声が聞こえてきました。

「……すつ、すつげええええ！　なんだこれ！　なんだこれ！！　これ、お前がやってるのか？　お前、魔法使いだな！　すつげえ！　僕、魔法使いと一緒に森に入って冒険してる！」

わたしの心配を余所に、男の子は舞い踊るマナの奔流を見て大興奮していました。わたしは少しの間ばかんとしてしまいましたが、思い直して『法術』に集中しました。もうすぐ終わる。そしたらお空に帰れる。この男の子にも嫌われなかった。なんだか、わたしにとっては帰れることよりも、そっちの法が大事なような気もしていました。

やがてマナはソフトボール大の光り輝く球になりました。わたしは服の上からそれを身体に取り込みます。杉の木さんが力を貸してくれたので、暴れ回るような乱暴なマナはほとんど混じっていませんでした。

「ありがとう、杉の木さん」

木は無言でわたしたちを見下ろしています。でも、わたしには何となく杉の木もわたしたちにあいさつをしてくれている、そんな風に思えました。

『はやくおうちへお帰り』

そんな杉の木の声が、わたしには聞こえたような木がしました。

「終わったのか？」

わたしは黙ってこくりと頷きました。夜の闇は先ほどより濃くなっています。わたしだけならここから空に帰れる。でも、この男の子にはそんな『力』はない。わたしはまた涙が目の縁にたまってくるのを感じました。

「大丈夫だ！　この山道は何度も歩いてる。それにほら！」

男の子は懐中電灯でなにか丸いものを照らしていました。それは小さな方位磁石でした。

「これがあるから、方向は分かる！ とにかく森を一回抜けよう！」  
わたしは頷きました。この子が帰れるところまではついていこう。  
せつかくわたしをここまで案内してくれたのに、このままわたしだけがお空に帰るわけにはいかない。だから、もう少しだけ。もう少しだけ許してください、クラオカミさま。

山道から人の整備した遊歩道にでるのに、方位磁石は大活躍してくれました。

「よし！ 遊歩道に出られた！ この方向にまっすぐに行けば絶対に展望広場に出られるはずなんだ。そこからさっきのフェンスの穴のあるところまでは遊歩道沿いに歩いて行ける。もうすぐ帰れるぞ！」

男の子は眩しい笑顔でわたしを励ましてくれます。きっと、雨に濡れて寒くて、自分だって心細いはずなのに。真っ暗で怖いはずなのに。

「さあ、行こう！ でも、帰る前にちょっと寄り道しようぜ！」

「え？ え？ 寄り道って……？」

「展望広場だよ！ この森林公園、夕方には閉まっちゃうだろう？」

だから、夜に一回来たかったんだ！ きつと街を見下ろしたら綺麗だぞ！」

男の子は右手を差しだしてきます。わたしは少し迷いながら、その暖かい手を握りかえました。ドキドキするのに、何故か安心する。この男の子がいてくれたら、わたしはもっと勇気が出せる。そんなことを確信させてくれる暖かさでした。

「じゃあ、行くぞ！」

わたしたちはすっかり暗くなった森林公園の遊歩道を走りました。でも、空には月が、地上には街の明かりがあつて、森の中よりはずつと遊歩道の上は明るかったです。男の子が手を引いてくれます。わたしもきゅつとその手を握りかえます。悪いことをしてるはずなのに、何故か笑顔になってしまえます。こういうのを『むじゅんって言うんだぞ』とあとになって男の子は得意げに教えてくれました。

た。どんな物にも穴を開ける矛と、絶対に穴が空かない盾を売って商人のお話だそうです。

「悪い子になってしまつのに笑顔になっちゃうなんて、おまえ『むじゅん』してるぞ?」

「うん。わたし、『むじゅん』してる!」

遊歩道の坂道が終わる頃、眼下には街の明かりが広がっていました。

「さあ! これが僕たちの街だぞ!」

「っ! すごい……!」

家々の灯や、車のヘッドライトやテールライト、街灯やネオンが渾然一体となつて、まるで一つの宝石箱のように見えました。街の向こうは港です。泊まっている船の電飾が宝石箱の縁取りのようにきらびやかでした。わたしは思わず息をするのも忘れて、その眺めに見入っていました。空の上からの眺めとそんなに変わらないはずなのに、なんでこんなに輝いてみえるのか。わたしにはその理由が分かりませんでした。

手すりが高すぎて視界を遮るので、わたしたちはベンチに靴のまま上がりました。どんどん悪い子になっていっちゃいます。それなのに、なぜこんなにも楽しくて、安心するんでしょう。その時、男の子が展望広場にある時計を気にしているのに気がつきました。時刻は七時五〇分。うちの人もきつと心配しています。わたしはそれまでの高揚感がすうつと消えていくのを感じていました。

「そろそろ、帰ろうか」

「うん……」

「そ、そっぴや、まだ名前聞いてなかったな」

「え……?」

「名前だよ、名前」

「あまね……」

「あまね? ヘンな名前だなあ」

「そんなことないもん! あなたのお名前は?」



「えっ……、俺の名前は……」

男の子が何故か戸惑いの表情を浮かべます。どうしたんでしょう、人にはあれほど気軽に名前を聞いたくせに、自分の名前はわからないのでしょうか？

「……みーくん。みんなそう呼ぶ」

男の子は何故か顔を赤くしてそう呟くように教えてくれました。みーくん……。とっても可愛らしい名前。

「今お前、可愛い名前だと思っただろ！」

「うん……ダメだった？」

「ダメに決まってる。男につけるあだ名じゃない」

みーくんはぶすつとしてベンチに座ってしまいました。わたしはどうしてみーくんが急に不機嫌になったのか、不思議でした。それと同時に、わたしが不機嫌にさせてしまったのではないかと思って胸がきゅつと苦しくなりました。わたしが下を向いて胸を押さえていると、みーくんが心配げに覗き込んで来ます。その顔にはさっきまでの不機嫌さは少しもなくて、わたしのことを純粹に心配してくれているんだと分かりました。

「どうした？ 気持ち悪いかな？」

「ううん、そうじゃないの」

「じゃあ、何か怖いのか？」

怖い。そう、怖いんです。これから一人で空に帰って、もう二度とみーくんに逢うこともないと思うと、それだけで涙がにじんで来ます。でも帰らなければなりません。そのためにみーくに頼んであの杉の木のところまで案内してもらったのですから。

「ううん。大丈夫。何も怖くないよ」

わたしは、嘘をつきました。本当はもっと一緒にいたいのに、もっと微笑みかけて欲しいのに、ずっと手を握っていてほしいのに。

「時間、遅くなっちゃった。わたしも帰らなきゃ」

「そうだな。さすがにお仕置きされるな、これは」

みーくんがおどけた調子で同意してくれます。きつとわたしを心

配させないためでしょう。

「なあ、またこの森林公園で遊ぼうぜ。今度は他の友達も一緒に連れてきて」

「それは……」

「あ、もしかしてあまねちゃん、友達いないのか？」

わたしは唇をきゅつと噛みしめると、コクリと頷きました。何故か涙が出そうになってきました。今まで空の上で独り過ごしていたときには、こんなに寂しいなんて感じたこともなかったのに……。涙が出そうになると、ぽつり、ぽつりとまた雨が降り始めました。

「それじゃあさ、僕と、僕のもとだちのひなたちゃんとあまねちゃん、で遊びに来よう！ 約束だ！」

「約束……？」

「うん、約束！ 指切りしよう！」

みーくんはわたしの右手をとるとその小指に自分の小指を絡めて来ました。

「ゆーびきーりげーんまーん、うーそつーいたーらはーりせーんぼーんのーますっ！ ゆーびきった！」

小指と小指がするりと離れ、約束は成立しました。わたしはいつか、みーくんと、そのお友達のひなたという人と、この森林公園で遊ぶのです。それがいつになるかはわたしには分かりません。でも、約束は破ってはいけないと、クラオカミさまも仰っていました。だから、必ず守らなければいけません。それがいつになっても、です。

「約束だぞ！ いつか、必ず！」

「うん……わかった！」

「そして、その時には僕があまねちゃんの友達になってあげる！ ひなたちゃんもきつとなつてくれる！ これも約束だ！」

わたしに友達が出来る……？ みーくんの言葉で、きょうはいたい何度勇気づけられたでしょう。わたしは泣きそうになっていた顔をあげて、目の縁にたまっていた涙を指で拭いました。もういかなくは。

「じゃあ、わたし、帰るね。……みーくん、ありがとう。さようなら！」

わたしは展望広場に隣接した芝生広場の方へ歩いて行きました。天が開けていて、飛ぶのには都合がよかったからです。

「おい。そっちフェンスの穴とは反対方向だぞ！」

わたしは記憶を消す『法術』を発動しました。まだ不慣れなので詠唱に時間がかかります。

「あまねちゃ」

何とか間に合いました。みーくんはわたしの肩に触れる直前に、その場に崩れるように倒れ込みました。下は芝生です。怪我の心配はないでしょう。

「今日は本当にありがとう。さよなら、みーくん。……またね」  
わたしはみーくんの左頬に軽くちよんと唇をつけました。さあ、空に帰りましょう。約束の果たせるその日まで

\*\*\*

「おはよう、雨音」

「あ、おはようございます！ どうです？ 今日からは制服で通学ですよ！」

仁正学園の女子夏服は、短いチェックのスカートとブラウスにリボントイ。ふふつ、ちよつとみーくんをからかってみようかなあ。よし、くると一回転！スカートの生地が軽いもので、一回転すると遠心力でふわりと広がります。あ、見てる見てる。彼の視線をふとももの辺りに感じますよ？

「あー、みーくん、なんかえっちな目でみてましたね？」

「そそそ、そんなことはないぞ？ 気のせいだ気のせい」

ほんと、みーくんは分かりやすい男の子です。絶対わたしの生脚に目が行ってたのに、苦し紛れに言い訳するあたりが可愛いです。

「ホントですかあ？ 目が泳いでますよ？ まあいいです。通学力

バンも靴も用意しましたから、今日からは普通の女子高生です！」  
そう、みーくんが願い事を決めるまでの短い間だけ、わたしは『普通の女子高生』を演じるんです。彼が最後に何を願うのか、わたしには分かりません。でも、何を願おうとも、みーくんはみーくんです。きっと、優しさに満ちた願い事をしてくれるに違いありません。

わたしはみーくんの朝食をダイニングテーブルに運びながら、その願い事がわたしにとっても叶え甲斐のあるものでありますようにと、心の中で呟くのでした。

幕間劇

T w e l v e   Y e a r s   A g o . . .

(後書き)

いかがでしたか？    もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。

## 第三章

### それぞれの矛盾

#### 1（前書き）

第三章の1をお送りします

人間は誰でも矛盾を抱えて生きてます。それは精霊も同じのようです。

それではどうぞ！

### 第三章

#### それぞれの矛盾

1

雨音がひなたの本当の気持ちを俺に聞かせてくれてから、もう二日経った。今日は金曜日、土曜は休みなので今日一日を乗り切れば楽しい休日だ。

あとで聞いた話なのだが、あの時雨音は『法術』を使っていたんだそう。ひなたの心が頑なで、このままでは心が壊れてしまいかねないから。雨音はそう言っていた。きっとそれは本当の事なのだろう。

「わたしたち精霊には、人の心が形になって見えるんです。ひなたさんの心は、傷つき、ひび割れていました。あのまま放置していたら、きつとそう遠くない将来、ひなたさんは壊れてしまったでしょう。そうなってからでは遅いから、わたしは『法術』を使いました。……これは間違っていたでしょうか？」

雨音の問いに俺はどう答えたものか迷っていた。確かに雨音のやったことは、『法術』でひなたの本心を聞き出す、という点では反則なのかもしれない。でも、反則だとしてもそれが許される場合もあるのではないかと俺は思うようになっていた。

たとえどんなに正しい事だとしても、それが大事な人を傷つけることになるなら、俺は反則を犯してでもそれを防ぎたい。雨音もきつと同じなのだ。だって、雨音にとってもひなたは特別な存在になりつつあるのだから。

午後の教室には、先生の単調な英語の構文の説明と、板書をノートに書き写すカリカリという鉛筆の走る音だけが響いていた。今日は久々にまとまった雨が降っている。雨音曰く「ずっと晴れだと、植物が弱ってしまいます」とのことだ。平静な状態でも雨を降らせることが出来たのかと、俺は考えてみればごく当たり前のことに感心してしまった。

雨音は雨の精霊だ。雨を司り、地上に潤いをもたらす。ちよっぴ

りドジで、常識に欠けるところがあつて、でも誰よりも優しい。そんな雨の精霊が、俺の元にやってきてもう六日だ。その間、俺は大事なことを忘れていた。そう、最後の願い事だ。

あまりに普通の日常が続いたため、すっかり何故雨音がここに留まっているのかを忘れていたのだ。

『もう、本当にわすれてたんですか？　しかたないですね。でも、これからちゃんと考えてくださいね』

今朝の朝食のとき、雨音が「願い事は決まりましたか？」と聞いてきたので、ついすっかり本当の事を口走ってしまったのだった。適当に誤魔化しておけばよかったものを。

右隣の席では、いつも通りのひなたがノートを取っていた。いや、いつも通りというのはちよつと違う気がする。言われなければ気づかないほどだが、うつすらと化粧をしているのだ、あのひなたが。化粧と言ってもリップグロス程度だが、正直最初見たときはそりゃビックリした。なんだか、ひなたが別人のように見えて、まともに目を合わせることも出来なかった。

口調はいつもの通りだったが、少しだけ言葉の端々に女の子ぽさが滲むようになったのは、きつと雨音のおかげなのだろう。クラス的女子連中も「ひなたんカワイー！　どうしちゃったの？」だの「男だな、男ができたんだな？」だのとはやし立てていた。でも、そんな騒ぎを困った顔をしながらも素直に受け止めてしまっているあたり、ひなたの内面の変化は相当大きいようだ。

やがて退屈だった授業も終わり、待ちに待った部活の時間がやってきた。毎日退屈な授業を受けているのも、この時間の為だと言つてもいい。最初に中国武術研究会に入ったときは、楽をしたくて入ったのに、なんて退屈でキツイ練習をする部活なんだと後悔したものだ、いまとなつてはそれもいい思い出だ。

ちなみに、雨音は正式に入部の手続きをして、中国武術研究会の部員として練習に参加している。相変わらず『法術』を使ったチートをやってるようだが、まあ害はないからいいか。入念にストレッ



チをして、練習に備える。怪我の防止にもなるし、身体にもいい。この辺で手を抜かないのが俺の流儀だ。

壁についているストレッチ用のバーに足を引っかけ、片足ずつ正面と側面を伸ばしていく。少しずつ身体感覚が研ぎ澄まされていくのが分かる。自分の身体との対話が、中国武術のもっとも大切な秘訣の一つだと、顧問の平賀先生も言っていた。今ならその意味がよく分かるような気がする。

雨音はもともと身体が柔らかい。というより、女の子にありがちな筋力不足による関節の可動範囲の広さなんだけど、前後開脚とかを苦もなくやってるのを見ると、俺も女の子に生まれてたら良かったかもしれないなど思ってしまう。もっとも、筋力と柔軟性を両立するのは男女問わず至難の業なのだが。それほど、中国武術では柔軟性が大切なのだ。

ストレッチを終える頃に顧問の平賀先生が姿を見せた。

「今日はちよつと遅くなったけど、みんなストレッチは終わってるかな？ よし。それじゃあ一回套路（たうてい）を通そう」

套路とはいわゆる型のことだ。様々な技を組み合わせで作られていて、それを繰り返し練習することで、太極拳の基本原則を身体に叩き込むという目的がある。套路を通すというのは、型を最初から最後まで通して練習する、ということだ。ちなみに、俺たちのやつてる陳式太極拳には、いわゆる太極拳の『一路』と、激しい発勁が連続する『二路』の二種類がある。『二路』は別名『炮捶（ほうすい）』とも呼ばれている。

全員が一定の間隔をとって整列する。起式（最初の動作）、金剛（こんごう）搗碓（とうたい）……。もう動作を身体が覚えていて。全身の関節が、筋肉が、頭のとっぺんから足の爪先、手の指先に至るまで、連動して動いている。意識通りに身体が動く。これも太極拳で大切な事の一つだ。最初から最後まで通すのに約一二分。収式を終える。汗は噴き出しているが、呼吸の乱れはない。うん。いまのは自分でいうのもなんだけど、いい太極拳だったと思う。

全員で一路を通した後は、部員がそれぞれ自主的に練習する。俺はさっきも言った『二路』を重点的に練習している。最近になってようやく二路の面白さが分かってきた気がするのだ。力任せにバンバン打つのではなく、緩んだ状態から瞬間的に力を出すことの難しさが、逆に楽しさに繋がっている。

それが分かってきたのと同じ時期に、平賀先生に初めて自分の太極拳を褒められたのだ。自分のやっтерることが間違いないことが認められた気がして、その日はニヤニヤ笑いが止まらなかった。ひなたにも「みーくんキモイ」などと言われてしまったけど問題ない。

雨音はといえば、部長の春日野先輩がつきつきりで指導している。陳式太極拳の看板技である『金剛搗碓』を何度も繰り返して練習しているのだ。俺もはじめたときはそうだったな、などとちょっと懐かしい想いに浸ってみたりもする。とにかく太極拳の練習というのは、正しい動作の反復練習に尽きるのだ。他にも正しい形で静止し続ける練習『站椿功』<sup>たんとくこう</sup>などもあるが、これは套路をしっかりと練ることで代用が利く。

最初は平賀先生に「一日に二〇回金剛搗碓を練習しなさい」と言われてたけど、俺は一日百回やっていた。他の技も同じで、言われた回数の最低三倍はこなしていた。そのおかげか、普通は一年くらいかかる一路の習得が僅か半年で終わって、二路も一年生の終わりまでには覚えてしまって、独りでも練習できるようになっていた。

もちろん、ただ覚えればそれでいいというわけじゃない。覚えたところがスタートラインで、一生かけて練り上げていくのが太極拳だ。俺の太極拳なんて、昔の名人に比べたらそれこそガチヨウの踊りみたいに見えるに違いない。

俺は二路の技を一つ一つ取り出して、何度も繰り返す単式練習<sup>たんしきれんしゅう</sup>に没頭していった。

\*\*\*

「……くん、みーくん。練習終わりですよ？」

繰り返し単式練習をしていた俺の耳に、鈴の音のような少女の声が届く。もうそんな時間か。一時間半ほどぶつ通して単式練習をしたことになる。練習用のカンフーパンツと長袖のＴシャツは、汗に濡れてぐしょぐしょだ。絞ればきつと汗がじゃーっと出てくるに違いない。

「雨音はどこまで覚えた？」

気を落ち着かせるために大きく深呼吸しながら収式の動作をする。九回ほど繰り返し返したところで、俺は軽く整理体操をはじめた。

「まだ最初の予備式と金剛搗碓だけです。でも難しいです。……『法術』をなるべく使わないようにしてるので」

「ん？　なんでまた」

「だって、あれは人間にとっては一種のずるじやないですか。だから、なるべく使わずに練習してみてるんです。その方が楽しいですし」

壁際に置いてあったスポーツタオルで汗まみれだった顔を拭く。

窓の外はまだ雨が降っていた。とりあえず、シャワーを浴びて、着替えてこよう。

「んじゃ、雨音も着替えておいでよ。着替えが終わったら昇降口の所で待ち合わせ。ひなたも来るだろうからね」

「わかりましたっ！　着替えもちゃんと手作業ですよ？」

「分かった分かった。人間はそれが当たり前なんだから、自慢しないの」

雨音はちょっとふくれた顔をして見せたが、次の瞬間にはぱつと花が開くような笑顔を見せて更衣室の方へと向かっていった。サブアリーナの入り口では、女子部員たちが雨音を待っている。

「それじゃみーくん、またあとで！」

大げさにてをぶんぶん振って、雨音は女子部員たちと一緒に更衣室へと歩み去った。さて、今日もいい汗かいた。俺はタオルと陳式

太極拳のテキスト本を持つと、男子更衣室へと向かった。更衣室にはコインロッカーとシャワー室が併設されている。コインロッカーとはいっても、鍵を開けると百円玉が戻ってくるので実際は無料だ。この更衣室はサブアリーナ専用なので、他の部の部員はいない。

うちの学園は中高一貫の進学校なのだが、スポーツ、特に武道系のクラブ活動に力を入れている。学校の校訓にも「文武両道」の文字があるほどだ。クラブだけではなく、授業でも何かの武道を選択して、中等部から高等部までの六年間みっちりとしごかれる。全員が初段以上を取れるほどの実力をつけてしまうのだ。ちなみに俺は授業でも太極拳を選択している。

汗だくになったTシャツとカンフーパンツ、それに下着を脱ぎ、ビニールの袋に放り込む。これは帰ったら即洗濯だ。放っておくとこの季節、カビが生えてえらいことになる。

シャワーは有り難いことにちゃんとお湯が出る。この辺は私立の学校だからだろうか。公立の高校に行った友達に聞いたら「シャワーなんて水しか出ないよ」という返事が返ってきた。まあ、普通はそんなもんなのだろうな。この学園が恵まれすぎてるってことだ。

本当は使うのを禁止されてるボディソープを身体に塗りたくり、さつと洗い流す。シャンプーもしたいところだけど、お湯を頭からかぶって洗い流して我慢する。あとは持ってきていたバスタオルで身体を拭いて、着替えるだけだ。

「あれ？ 換えの下着……忘れてきた？」

着替えようとして、スポーツバッグを漁るが、肝心のパンツが見あたらない。さっきまで穿いていたパンツは残念ながら汗でぐしょぐしょで、とてもじゃないが着用に耐えない。

「しかたない。ここはノーパンで行くしかあるまいな」

下着なしで制服のスラックスを穿く。なんだか股間が妙に頼りなく感じるのは気のせいではないだろう。普段意識しないパンツ様の偉大さを心の底から感じる俺であった。ほんと、パンツって大事なんだな。

万が一にもファスナーが開いていたりしないように、念入りに身支度を確認する。よし、これならまあ家に帰り着くまでは凌げるだろう。俺は通学鞆とスポーツバッグをロッカーから取り出すと、更衣室を後にした。

体育館の昇降口では、すでに着替えを終えた雨音と、長刀袋に防具一式という大荷物を持ったひなたが数人の女子生徒と談笑していた。まずひなたが、続いて雨音が俺に気づき、手を振ってくる。

「おっそーい！ みーくんがこんなに遅いのはなにか怪しい。きつとボクらには言えない秘密があるにちがいないね！」

ギクウツ。ひなた、お前はエスパーか。エスパーなのか！ なぜ俺の心を読めた！ などとは口が裂けても言えない。言ったが最後、卒業した後も『ノーパンマン』だのなんだの不名誉な渾名で呼ばれることになるに決まってる。俺は何となくすーすーする股間を気にしつつも、下駄箱から自分の革靴を取り出して足をつっ込んだ。

「さ、帰ろう！ 今日はかなり汗かいたから、帰ったら即風呂だな」  
「ふーむ、なんか怪しいんだよねえ。もしかして、換えのパンツ忘れてノーパンとか！」

嫌な汗が噴き出てくる。なんでそうクリティカルな所で正解を連発するんだ、ひなた！

「あっはっは！ まっさかそんな訳ないだろう！ どこの間抜けだよ、パンツ忘れるなんて」

すいません、この間抜けです。もうそれ以上突っ込まないでください、ひなたさん。

「そうよねえ！ そんな間抜けいるわけないよねえ！ あっはっは」

「あっはっは！」

「ところで、みーくんパンツ穿いてないでしょ」

「何故分かった！ ハッ！」

しまった

！！ なぜこんな単

純な誘導尋問に引っかけたんだ、俺は！ これで俺は『ノーパンマン』確定だあああっ！ 女子部員たちが俺をみてヒソヒソと何

か囁きあっている。雨音は……苦笑いを浮かべながらこつちを見ている。

（くそっ！ この窮地を乗り切るには……雨音の『法術』に頼るしかないッ）

俺は必死に雨音に目配せした。だが、雨音は小首をかしげて頭の上に『？』を浮かべている。ええい！ ひなたの気持ちには気づいてるのに、俺のこの救いを求めるサインには気付きもしないのかあッ！ だが、神は、いや精霊は俺を見放さなかった。

『みーくん、もしかしてわたしに助けを求めています？』

『ようやく気づいてくれたか！ 頼む、ノーパンマン扱いは嫌だああッ！』

『でも、これが最後の願いでいいんですか？』

『うっ！ そ、それは困るかもしれない。ううっ……』

『冗談です。ここはわたしの判断でおたすけすることにします。ほかでもない、みーくんのピンチですから。その代わり、あとで一つだけお願いを聞いてもらいますね』

雨音の声が頭の中で響いた瞬間、周囲の音が消え去った。見まわせば、ひなたを初めとした女子生徒たちが固まったように動きを止めている。

「わたしの『法術』で時間を止めています。これから暗示をかけてその……パンツのことはみなさんの記憶から消してしまいます。今保有してるマナの量だと、時間を止めていられるのは主観時間で三〇分というところです。その間に家に戻って、パンツを持ってきて下さい」

「わかった！ 恩に着るよ！ じゃあ、行ってくる！」

俺は不安定な股間をすこしかばいながら、それでも全速力で家に向かった。歩いて一五分の道だ。走れば半分で済む。静まりかえった街のなかを、俺の足音だけが響いていく。バスが、車が、電車が、人が、時を止められて微動だにしない。やがて道は住宅街へと入っていく、見慣れた交差点をいくつか曲がると、俺の家が見えてきた。

時間には余裕があるはずだ。玄関の鍵を開け、靴を乱暴に脱ぎ捨てると、俺は二階の自分の部屋に飛び込んだ。タンスを開くと目的の偉大なる下着、トランクスを取り出した。スラックスを脱ぎ捨て、トランクスを装着！ 不安定だった股間のモノがぴたりと安定する。すぐにスラックスをはき直し、階段を駆け下りる。革靴に乱暴に足をつっ込むと、玄関の扉を全力で開く。念のために鍵はしっかりとかけて、開きっぱなしになっていた門扉をダッシュで駆け抜ける。帰りの道も、ダッシュダッシュ！ 時間を止めるのにどのくらいのマナとやらが必要なのかしらないけれど、遅れたらもしかすると雨音が消滅してしまうかもしれない。そう思うだけで脚に加わる力が増していく。陳式太極拳で鍛えた脚力が、遺憾なく発揮されている。

最後は校門まで続く長くて緩い上り坂だ。これを登り切れば体育館の昇降口まではほんのちよつとだ！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！

雨音！ もういいぞっ！」

「っ！」

昇降口に飛び込むと同時に、雨音が言葉の旋律を紡ぎ出す。雨音の言葉が終わると、雨音の身体が白い光を纏い、光はどんどん大きくふくれあがっていった。俺は手で目を覆い、顔を逸らせて事が終わるのを待った。

「みーくん、終わりましたよ」

雨音の声が耳元で聞こえた。恐る恐る目を開けると、そこにはいつも通りの時間の流れが戻っていた。ひなたは中国武術研究会の女子部員となにやら談笑していて、さっきまで人をノーパンマンに貶めようとしていた様子は微塵も感じられない。

雨音はというと、額に汗の粒を浮かばせながらも、柔らかな笑みを浮かべて俺を見上げていた。やはり時間を止めるなどという大技は、相当の負担だったのだろう。

「ありがとっ、雨音。おかげでノーパンマン扱いされずに済んだよ」

「いえいえ。いいんです。これはわたしがよかれと思ってやったことですから。それに、今回の件はちゃんと交換条件がありますしね」  
そうだった。何か一つ、雨音の願いを聞かなければいけないんだった。それが俺に出来ることなのか、それともんでもない無理難題なのか。これは大問題だぞ？

「じゃあ、お願いを言いますね」

雨音はごく短い願いを俺に伝えた。

「というわけです。よろしく願いしますね、みーくん」

\*\*\*

「みーくん、まだですかあ？」

「もう少しだよ。今大事な作業中なんだ、もう少し待ってて！」

無事家に帰り着いた俺は、雨音のたつての願いで現在キッチンに立っている。よし、豆板醤の香りが立ってきた。ここでスープを投入だ！

「待ちきれませんっ！ はやくっ！ はやくっ！」

雨音の願い事、それは四川式本格麻婆豆腐を作ってくれとのことだった。どうも前に食べたときに癖になったらしい。あれほど「赤い悪魔」だのなんだのと文句を言ってくれたくせに、今は早く作れと催促してくる。なんか釈然としないものを感じながらも、俺は麻婆豆腐作りに没頭する。あらかじめ茹でておいたサイコロ切りの豆腐を投入、しばらく煮たら水溶き片栗粉でとろみをつけ、ひと混ぜして完成！

「出来たぞー！　すぐテーブルに持っていくから、大人しく座って！」

「麻婆　麻婆　辛くて痺れて天国の気分」

何だか調子っぱずれな歌を歌いながらダイニングテーブルにつく雨音。俺は皿に真っ赤な麻婆豆腐を盛ると、最後の仕上げの花椒を振りかけた。豆板醤の香りと花椒の香りが鼻腔をくすぐり、思わず



口の中につばが湧いてくる。

「しかし、あんなに『辛いモノばかり食べると馬鹿になる』とか言ってたのに、いったいどういう風の吹き回し？」

「唐辛子の摂りすぎはあまり健康にいいとは言えませんが、今日は特別です。大量にマナを消費する『法術』の使い方をしましたから」

「マナと麻婆豆腐とどう関係があるの？」

「唐辛子は、体内のマナを活性化させる作用があるんです。マナを感じられない人でも、唐辛子を食べると汗が出てくるでしょう？」

それになにより、みーくんの麻婆は特別ですから」

「特別ねえ……。四川料理以外にもレパートリーがあることはこの前の鯖の味噌煮で証明したと思うんだけど」

雨音はちりれんげで麻婆豆腐を掬うと、ふーふーと少し冷ましてから口に入れた。

「ん〜辛くて痺れてたまりません！！三日に一度は麻婆にしましょう！」

なんだか雨音がとんでもないことを言いだした。豆板醤とか花椒とか、普通のスーパーじゃなかない物が無い食材は、ちよつと離れた街の中華街の食料品店で買っている。電車で三〇分くらいだから大したことは無いんだけど……。

「そうなんですかつ？ 中華街、行ってみたいです！」

とりあえず、今日の借りは麻婆豆腐でチャラになった。願い事にもカウントされていないし、まだゆっくり考えることが出来る。それにしても、時間まで操れるというのは考えてみればとんでもない『法術』なんじゃないか？ うーん、やっぱ最後の願いはあの『法術』をもらうつてのは……いや、それはないな。俺にそんな大それた力があつたとしても、きつとろくな事にならない。それに使い損なったら消滅してしまう。そんな『法術』を操れる雨音は、さすが雨の精霊だ。

最後の願い、何にしよう。そろそろ本気で考えないといけない時

期に来てるような気がして、俺は一人決意を固めるのだった。

### 第三章

#### それぞれの矛盾

##### 1（後書き）

いかがでしたか？　もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9773x/>

---

雨の足音

2011年11月8日20時30分発行